

42430

教科書文庫

4
810
42-1938
20000
63428

2.1  
1938

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

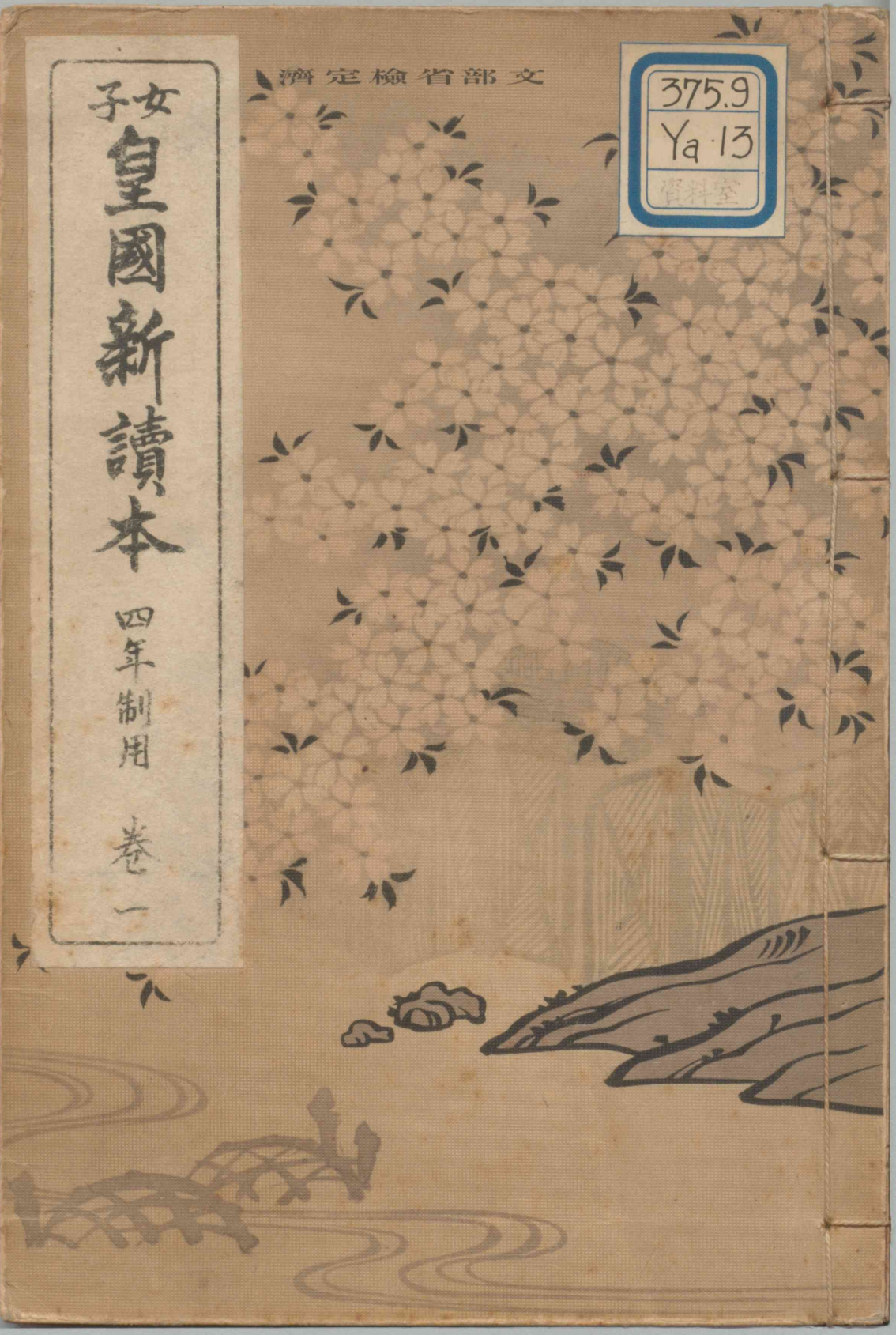
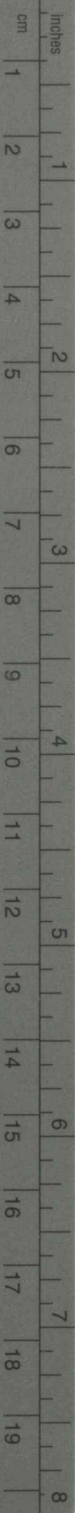


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省檢定

375.9  
Ya 13  
資料室

子女  
皇國新讀本  
四年制用  
卷一



資料室

文部省檢定濟

昭和三十一年二月二十八日高等女學校實業學校國語科

375.9  
Ya13

子女  
皇國新讀本

東京文理科大學  
助教授 山岸德平  
學習院教授 岩田九郎 編

東京株式會社  
帝國書院



筆峰紫原柳

鹿の良奈



卷一 目次

- 一 輝く春
- 二 忠節
- 三 爽かな心
- 四 遠足の歌
- 五 峠の茶屋
- 六 二宮金次郎
- 七 自然の音楽
- 八 新緑の奈良
- 九 初夏

- 深作安文 一
- 河野省三 二
- 西條八十 三
- 夏目漱石 六
- 武者小路實篤 三
- 鈴木鼓村 五
- 萩原井泉水 四
- 吉田絃二郎 一

一〇	花物語
一一	鬼界が島
一二	歌ごころ
一三	恩賜の葡萄酒
一四	談話
一五	精進湖より母へ
一六	手紙の懐かしさ
一七	心の糧
一八	故郷
一九	小坊主
二〇	曾呂利の頓才

吉村冬彦	二五
白井喬二	二七
北原白秋	二八
野上彌生子	二九
前田晁	三〇
有馬頼寧	三一
正岡子規	三二
湯淺常山	三五

二一	靜寛院宮様
二二	雁
二三	養蟲
二四	動物の表情
二五	甲冑堂
二六	秋草の花
二七	御仁愛に泣く

徳富蘇峰	二四
千家元麿	二五
薄田泣菫	二五
橘南谿	二六
辻永	二七

〔附録〕

日常最も誤り易い假名遣  
 國語假名遣一覽

雲雀(ヒバリ)



なごやか

紫雲英(レンゲ)の毛氈

# 女子皇國新讀本

四年制用 卷一

## 一 輝く春

春が来た。輝かしい春が来た。

空は麗かに晴れ渡つて、雲雀は朝から力強く春の喜びを歌つてゐる。國境の山々もいつしか雪の衣を脱ぎすてて、薄い霞の奥になごやかなその姿を横たへた。見渡す限りの野邊には、目も覚めるやうな緑の若草が萌えて、ところどころに紫雲英が緋の毛氈を敷いたやうに美しい

敷島の  
敷島の大和心を  
人間はば朝日に  
匂ふ山櫻花  
本居宣長  
爛漫

彩りを見せてゐる。



「敷島の大和心を人間はば」と歌はれた櫻花は、野にも山にも爛漫と咲き亂れて、朝日夕日に照り映えるさまは、實に我が日本の本の尊い姿を目のあたりに見る心地がする。

かな氣分に満たされるではないか。上には萬世一系の  
花  
櫻咲く日本！何といふ輝かしい言葉であらう。この語を聞いただけでも、我等の胸は美しく朗

聖天子  
君臨

地味肥沃

山水明媚

萬朶

聖天子が君臨ましまして、代々仁慈を垂れ給ひ、下には純良なる臣民が、世々誠忠を盡くして仕へ奉つてゐる。地味は肥沃にして穀物はよく實り、山水は明媚にして氣候は溫和である。空には富士の秀峯が雪を戴いて聳え立ち、地には萬朶の櫻花が雲の如くに咲き匂ふ。かかる尊く美しい國が、世界の何處に存在するであらうか。



美しき我が國

我等はこの輝かしい國に生れ、いまや女學生としてこ

制服

の名譽ある學校に入學することが出來たのだ。我等の前途には光が満ちてゐる。我等の周圍には喜びが溢れてゐる。新しい制服を着た時の胸のときめき、家を出る時の足の軽さ、校門をくぐる時の心の楽しさ、我等は今夢のやうな歡喜に包まれてゐる。

感激

この感激をしつかりと胸に抱きしめて、いつまでも忘れることなく、健康に注意し、勉強に精勵し、又一心に父兄や師長の教を守つて、かくも尊く美しい日本の少女として、清く雄々しく勉め勵まうてはないか。

精勵

深作安文

茨城縣の人

倫理學者

文學博士

櫻井の驛

大阪府三島郡島

本村

肝銘

二 忠節

深作安文

楠木正行は、櫻井の驛に於ける父正成の懇切な訓戒を、幼年の身ながら肝銘し、國賊足利尊氏を討伐することを以て己が任とし、朋友と遊ぶ時にも常に尊氏を討つ眞似を致しました。

年長じました時、畏くも後醍醐天皇には京都を御出ましになり大和に行幸せられました。この時、正行は、從弟和田正朝等と駈け參じ、御供を申上げて吉野に入つたのであります。吉野に於きまして、後醍醐天皇には、大層御難儀を遊ばされましたが、とうとう行宮で崩御遊ばされ、

後醍醐天皇

第九十六代の天

從弟(イトコ)

吉野

奈良縣吉野郡吉

野山

行宮



皇太子様が御位に即かれて、後村上天皇とられました。正行は度々兵を出して尊氏の軍を破りましたので、尊氏は部下の高師直と師泰とに二十餘國の兵を率ゐて正行を攻めさせました。正行は弟正時等と共に行宮に参り、奏上いたしますやう、

「先臣正成は微力を盡くして朝敵を挫き、先帝の大御心を安んじ奉りました。然る所不幸にして天下は復、亂れ、逆徒が大舉して攻め來るに及んで、遂に命を湊川におとしました。その時、臣は、年僅かに十一歳でございましたが、父の命を以て郷里河内に歸り、一族郎黨を集めて國賊を滅さねばならないと堅く決心致しました。

微力

復(マタ)

湊川

神戸市湊區  
湊川下流の地

一族郎黨

壯年

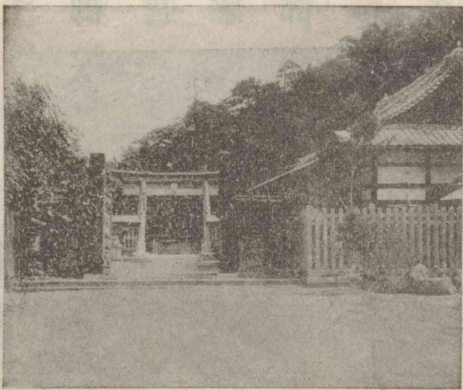
罹(カカ)る

首領

抛(トキ)つ

天顔

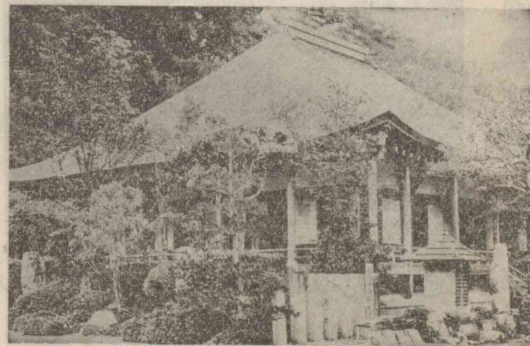
然るに今や臣は壯年の身となりました。若し不幸にして病に罹つて相果てることありますならば、上は不忠の臣となり、下は不孝の子とならねばなりません。今、賊の首領等が大舉して攻めて参りました。まさに臣が身命を抛つて御奉公致すべき秋であります。臣が賊の首を取らねば、臣の首を彼に授けるやうになるに相違ありません。この度の戦は實に勝敗の分れ目で御座いますから、畏れながら何卒、一たび天顔を



(る祀を行正)社神嘷條四

咽(ムセ)ぶ

拜し奉つて、戦に臨みたいと存じます。」と申上げて感激の涙に咽びました。すると畏くも天皇に於かせられては、御簾を高く掲げられて、正行を御みつめに成り、親しく御慰勞の御言葉を賜はりました。正行は再び感激の涙に暮れました。さうして部下を引連れて後醍醐天皇の御陵に参拜し、一族郎黨百四十三人の姓名を如意輪堂の壁に記し、その後、左の歌を書いたと傳へられて居ります。



如意輪寺

如意輪堂  
奈良縣吉野郡吉野村

梓弓

四條畷  
大阪府中河内郡枚岡村四條

泰然自若

雌雄を決す

巳(ミ)の刻  
午前十時頃  
申(サル)の刻  
午後四時頃

かへらじとかねて思へば梓弓  
なき數にゐる名をぞ止むる  
今は何も思ひ残すことが御座いませんから、正行は勇み進んで四條畷に参りました。敵兵は凡そ八萬騎で五隊に分れて居ましたが、正行は三千の兵を以て師直の陣に向ひました。敵兵は左右前後から正行に攻め懸りましたが、正行は泰然自若、三百騎を以て直進し、必ず師直と雌雄を決しようとして彼を目かけて攻め入り、一人で以て百人に當る決心で奮闘致しました。巳の刻から申の刻に至るまで三十回以上も合戦しましたので、部下の兵士は大部分死にました。けれども正行は眼を師直に注ぎ、ど

蝟（ハリネズミ）  
體長二十五釐位  
背面に太い針が  
密生する



うしても彼を倒さなければならぬと進んで戦ひまし  
た。敵は正行を目かけてさかんに矢を放ちましたから、  
正行も弟正時も丁度蝟のやうになつたと申します。そ  
こで正行は、もう戦は止めよ。敵に捕へられてはならぬ。  
と號令して、弟と差しちがへて死にました。時に年僅か  
に二十三歳でありました。  
かやうにして、正行は、天皇に對し奉つては忠臣となり、  
父正成に對しては孝子となつたのであります。日本の  
道徳では、忠孝二つながら全うすることが最大最高の理  
想であつて、正行はこの理想を見事に實現致したのであ  
ります。

（幼學綱要講話）

河野省三

埼玉縣の人  
國學者  
文學博士  
國學院大學學長

崇高

みやびやか

翻る

明治神宮  
東京市澁谷區代  
代木にある  
明治天皇・昭憲  
皇太后を合祀し  
奉る官幣大社

三 爽かな心

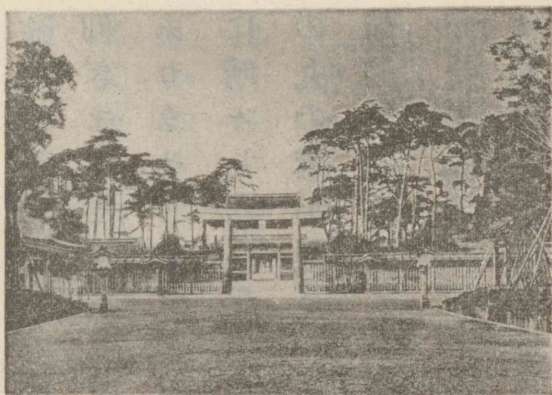
河野省三

私どもは、晴れた日に、東海の天に聳える富士山の姿を  
仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるので  
あります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然  
に晴々したみやびやかな氣分になるのであります。日  
の丸の旗がひら〜と翻つてゐるのを見ますと、そこに  
活動的な活き〜とした氣分が起つてくるのでありま  
す。或はまた、明治神宮に參拜いたしまして、神宮橋を渡  
り、白木のお鳥居をくゞり、清淨な參道を吸込まれるやう  
に進んで、清い水で手を洗つて、御社殿の前に參りますと、

清々(スガ)しい  
濠

神聖

神々しい



純真  
神髓

自ら清々しい尊い気分に含まれてくるのであります。更にもまた、松の緑の滴るお濠の前に立つて、我が皇室の御繁榮を思ひますと、何ともいへぬ神聖な気分が現れてくるのであります。神々しい、清々しい、晴晴しい心持こそ、實に我々日本人が、遠い昔から養つて來た心の眞の姿であります。建國以來、私どもの祖先が育てあげて來た純真なる心は、全く我が國民性の本質でありまして、所謂大和魂の神髓であります。

美化

もたまほし

す。かゝるさつぱりとした、廣い、しかも力強い氣分の充ち満ちた心が、即ち本當の眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。

明治天皇の御製に、

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり

とお詠み遊ばされてありますが、その爽やかな心は、取りも直さず、かやうな純真な氣分に外ならぬのであります。私どもがこの世に於て、毎日々々の生活を營むに當りまして、最も必要な氣分であり、且價值のある態度は、誠に

屈託  
排斥

天真爛漫

この爽かな心にあります。  
この爽かな心は、晴々しい廣い心持であります。徒らに物に屈託しない、ゆつたりとした心であり、又濫りに他を排斥しない、穩かな心であります。この心からして偏りのない爽かな氣分を味はふことが出来るのであります。爽かな心は、明快な裏表のない心持であります。温か味のある、生々とした生活は、世の中で最も望ましい生活であります。偽らない正直な態度は、最も力強い生活であります。宗教の生命も亦ここにあると信じますが、天真爛漫は即ち爽かな心の本體であります。爽かな心は、かく清らかで、温か味のある、生き〜とし

建設的

豊榮(トヨサカ)  
昇る

神道

惟神の道  
敬神尊王を旨とし  
天理人道を明らかにする我が  
國固有の教

畢竟  
生活の原理  
傳統的信念

看破

た心持でありまして、建設的に、有意義に、總ての物を生かしてゆく所の積極的精神であります。所謂朝日の豊榮昇る氣分が、即ちこの爽かな心の働きてあります。我々日本人は、かういふ爽かな心を根柢としまして、この尊い國體を築き上げ、この立派な國民道德を形造つて來たのであります。我が國民精神の現れである神道は、即ちこの爽かな心を以て、その根本としてゐるのであります。神道については、色々の説がありますが、畢竟はこの爽かな心、純眞な氣分に生きる日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百

風靡

本居宣長  
伊賀松坂の人  
國學者  
古事記傳四十八  
卷の著述がある  
享和元年歿  
年七十二

五十年前に、伊勢の國松坂にあつて、天下の學界を風靡した本邦空前の大學者本居宣長であります。その本居宣長の詠んだ有名な歌に、  
敷島のやまと心を人間はば朝日ににほふ山ざくら花



本居宣長

といふのがありますが、この大和心も、正しくこの爽かな心の姿を讃へたものであります。宣長は全生命を捧げて、この大和心の神髓を發揮すべく努力し

ひたすらに  
崇(アガ)む

單純  
嫌味  
毒々しさ

た人であります。力を極めて、この日本人の心に本來存するところの感情の麗しさ、真心の尊さを説いた人であります。さうして、ひたすらに我が皇室を崇め、我が國家



山櫻 川村曼舟筆

を愛する道を力強く主張した人であります。

清らかで單純で、さつぱりした眺であります。嫌味とか毒々しさとかのない、清いみやびやかな姿であります。そこに私ども日本人としての、心の特色が現れてゐるの

一途  
人性

鎮守の森

であります。我々日本人の祖先は、かういふ心持を明く  
淨く正しく直き心とも申しまして、道德の根柢はここに  
あると信じて居たのであります。  
かゝる爽かな大和心を本質とする神道は、たゞこのみ  
やびやかな心を心として、一途に我が皇室を尊び、我が國  
家を愛して來たのでありますから、神道の信仰が人性の  
自然に存してゐることは明らかであります。神社は我  
が神道を形に生かした表現でありまして、かの鳥居とい  
ひ鎮守の森といひ、氏神の御社といひ、いづれもみな清淨  
簡素といふことを尊んでゐます。そこにお詣りいたし  
ますと、私たちの心は、自ら清々しい爽かな氣分になつて

五十鈴川

三重縣神路山に  
發し神宮の傍を  
流れる

鎮座  
古歌

情操

しまふのであります。殊に、五十鈴川の清い流のほとり  
に、二千年の昔から鎮座まします  
皇大神宮に詣りますと、何人も古  
歌に歌はれてゐるやうに、  
何事のおはしますかは知らね  
ども忝けなさに涙こぼるる  
といふ感じに打たれるのであり  
ます。この何とはなしに感ぜら  
れる尊い心が、即ち日本人の神に  
對するありのままの姿で、最も氣品の高い宗教的情操  
であります。



筆丘映岡松

宮神大皇

心ともがな

拜誦

偲ぶ

挿話

遙拜式

明治天皇の御製の中にも、  
あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが  
心ともがな  
といふ御詠がありますが、この氣分をもつてゐることが  
大切な心がけてあります。この御詠を拜誦しますと、い  
かにも清らかに爽かな大御心を偲び奉らざるを得ない  
のであります。

思へば、もう二十餘年の昔になりますが、私は明治天皇  
に因み奉る一つの挿話をもつて居ります。それは明治  
天皇の御一年祭の行はれた時のことでした。ある小さ  
い田舎町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。

伏見桃山

京都市伏見區桃

山町

祭壇

首(ハジメ)

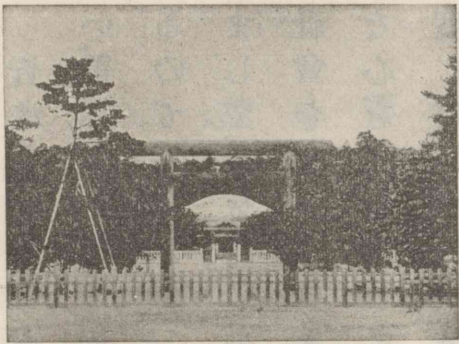
桃山の御陵

明治天皇の御陵

榊葉

榊は常緑の喬木  
で高さ八米位  
その葉は深緑色  
で光澤がある

生薑(シャウガ)



桃山御陵

伏見桃山の方に向つて祭壇を設け、ほどよく隔つた處に  
並びました老若男女は、その町長を首として、一同桃山の  
御陵を遙拜したのであります。

その式に列つた町民たちは、何れ  
も靜かに榊葉の立つ祭壇の前に至  
つて、恭しく遙拜しては立去りまし  
たが、その中に年の頃は五十歳位の  
八百屋さんがありました。つゝま  
しやかに祭壇の前に立つて、伏拜み  
ましたが、やがて徐ろに、左の小脇から綺麗に束ねた一束  
の生薑を取出して、丁寧に祭壇に捧げて置いて、一步退い



目撃

て一禮して立去つたのであります。これを目撃しました私は、誠に涙ぐましい感に打たれたのであります。皆さん、我々日本人の心の底には、かういふ飾り氣のない、單純であつて、しかも清らかな大和心が湛へられてゐるのであります。私たちは、この心を日々の生活に移しまして、物を清らかにし、心を爽かにして、偽らざる力強い社會を築いてゆきたいものであります。私はこの爽かな心を基礎とした生活を、常に快活にして眞面目なる態度と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活にして眞面目なところに、一番よく眞價を發揮するものであると信じます。

眞價

西條八十

東京市の人

詩人

早稻田大學教授

霽(こ)れて

### 四 遠足の歌

昨夜の雨はあともなく、  
霽れてかがやく今朝の空、  
心もをどる、身もをどる、  
遠足の日のうれしさよ、  
みんな仲よく向ひ合ひ、  
坐るもたのし汽車の窓、  
唱歌うたへば、軽々と、  
電信柱も飛んでゆく。

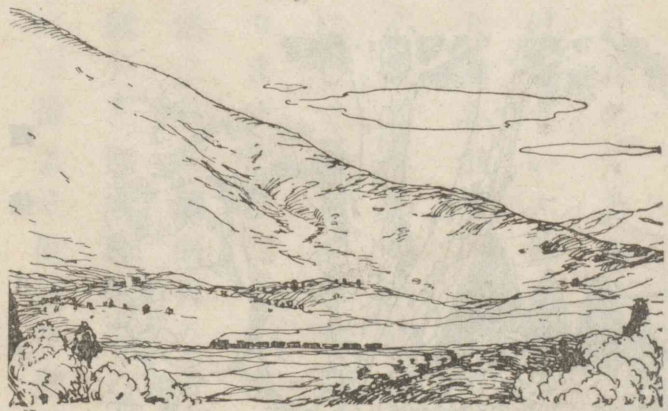
西條 八十



脚躑(ツツジ)  
老鶯(オイスウ)  
(グヒス)

山は躑躅の花ざかり、  
老鶯が遠く鳴く、  
険しいみちを登るとき、  
草鞋の紐を切らすなよ。

清い流のふちに來て、  
うれしく開く辨當に、  
母の情を想ふとき、  
頸に冷たき青嵐。



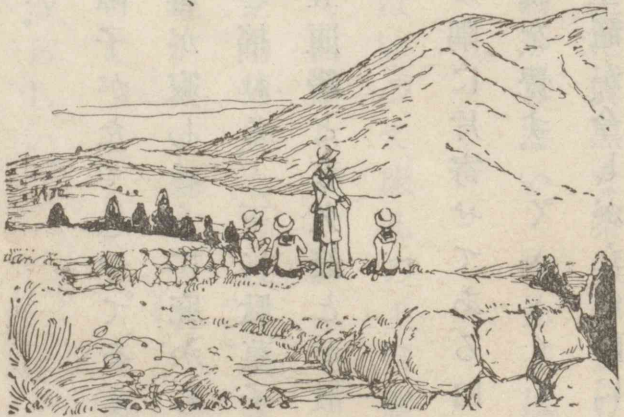
青嵐

微笑む

くづれし城の石垣に、  
偲べば悲し古英雄、  
摘みて見知らぬ花の名を、  
いざ先生にたづね見ん。

遊び暮して、くたびれて、  
ふたたび下りるステーション、  
あれ懐かしの町の灯が、  
微笑むやうにわれを待つ。

(少女純情詩集)



夏目漱石  
名は金之助  
東京市の人  
文學者  
大正五年歿  
年五十

屈託氣  
五厘錢



文久錢



土竈

五 峠の茶屋

夏目漱石

「おい。」と聲を掛けたが返事がない。  
軒下から奥をのぞくと、煤けた障子がたてきつてある。  
向う側は見えない。五六足の草鞋が寂しさうに庇から  
つるされて、屈託氣にふらりと揺れる。下に駄菓子  
の箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢とが散  
らばつてゐる。

「おい。」とまた聲をかける。土間の隅に片寄せである白  
の上にくれてゐた鶏が、驚いて眼を覺す。くゝ、くゝ  
くゝ。と騒ぎだす。敷居のそとに土竈が、今しがたの雨に

床几

狗

とぐろ

ぬれて、半分ほど色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけ  
てあるが、土の茶釜か銀の茶釜かわからない。幸ひ下は  
焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつとはいつて、床几の上に腰  
をおろした。鶏は羽ばたきをして、白から飛びおろる。  
今度は疊の上にあがつた。障子が閉めてなければ、奥ま  
で駆けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で、「こけつこ  
つこ。」といふと、雌が細い聲で、「け、つこつこ。」といふ。まる  
て人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。

床几の上には、一升柅ほどな煙草盆が閑靜に控へて、中  
にはとぐろを卷いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗

いぶる

る悠長ユウナガにいぶつてゐる。雨は次第に收る。暫くすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりとあく。中から一人の婆ババさんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈カマドに火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は暢氣チヤウキにいぶつてゐる。どうせ出るには極つてゐる。しかし、自分の店を明け放しても苦にならないと見えるところが、都とは少し違つてゐる。返事がないのに床トコ几ベンチに腰をかけていつまでも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。ここらがまことにおもしろい。その上、出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

暢氣(ノンキ)

「お婆さん、ここをちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎なお天氣で、さぞお困りでござんしよ。お、お、大分おぬれなさつた。今、火を焚いて乾かして上げましょ。」

「そこをも少し燃しつけてくれれば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、たゞ今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」

と立上りながら、しつくと鶏を追ひさげる。「こゝこゝ」と驅けだした夫婦は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏

焦茶色(コゲチヤイロ)

みつけて、往來へ飛び出す。

「まあ一つ。」と婆さんはいつの間にか、くりぬき盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無雜作に焼きつけられてゐる。

「お菓子を。」と今度は鶏の踏みつけた胡麻ねちと微塵棒とを持つてくる。

婆さんは袖無の上から褌ズボンをかけて、竈の前に蹲マシマシまる。余は懐から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しな



無雜作

胡麻ねち  
微塵棒

共に駄菓子の一  
種

蹲まる

がら、話をしかける。

「閑静でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。ここらでは夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、なほ聞きたい。」

「生憎けふは、——先刻の雨でどこぞへ逃げました。」

をりから、竈のうちがばちくと鳴つて、赤い火がさつと風を起して、一尺餘り吹き出す。

「さあおあたり。さぞお寒かる。」といふ。軒端を見ると、

軒端(ノキバ)

板庇

青い煙が突き當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、いゝ心持だ。御蔭で生き返つた。」

「いゝ具合に雨も晴れました。そら天狗岩が見えだしました。」

逡巡

逡巡として曇りがちな春の空をもどかしとばかりに

老嫗

吹き拂ふ山嵐の、思ひきりよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れつくして、老嫗の指さす方に、あら削りの柱の如く聳えるのが天狗岩ださうだ。〔草枕に據る〕

武者小路實篤  
東京市の人  
小説家

六 二宮金次郎

武者小路實篤

金次郎は夜中にふと目を覺した。すると又母のすすり泣く聲が聞えた。彼は黙つて寝たふりしてゐたが、母の忍び泣く聲をきいてはもう我慢が出来なくなつた。

「お母さん。なにを泣いていらつしやるの。」

十四歳の金次郎にさういはれるとお母さんもつい本當のことをいはないではゐられない氣がした。

「富次郎のことがつい思ひ出されるのだよ。今時分泣いてはしないかつてね。乳がはつてくるたびに富次郎のことが思ひ出されて、つかなくなるのだよ。」

十四町程  
約一五三〇米

さういはれると、金次郎も涙が出かけて困つた。金次郎には二人の弟があつた。十一歳の三郎左衛門と、二歳の富次郎と。そして父がなくなつた時、母の手一つで三人の子は養へないといふので、末子の富次郎だけ十四町程はなれた縁者の處へあづけてあつたのだ。

「お母さん。」金次郎は決心したやうにいつた。

「富次郎をつれて歸つておいでになつたらいゝではありませんか。赤坊が一人位ゐたつて、どうにかなりますよ。僕達が本氣になつて働けば。」

「それでもね。」

「お母さん可哀さうではありませんか。つれて歸つて

いらつしやい。そして皆で元氣に働ませせう。赤坊一人位どらだつてなるではありませんか。」

「それぢや、つれて歸るかね。」

「それがよろしい。さうおしなさい。」

子供ではあるが、金次郎を唯一のたよりにしてゐる母は、かう金次郎にいはれると急に元氣になつた。そして起き上つて着物を着かへだした。

「お母さん、朝になつてからおいでになつたらいゝではありませんか。今、子の刻ですよ。」

「つれて歸るとなると、もう一刻も辛抱が出来ないよ。月もいゝから一寸いつてくるよ。」

子の刻  
午前零時から一  
時まで 眞夜中  
のこと

「だつて随分ありますよ。」

「富次郎をつれて歸るためならね。」

金次郎も起きた。そして母を送り出すと彼は泣き出した。併しそれは悲しいのではない。決心したのだ。

金次郎はその前からよく働くので皆を驚かしてゐた。彼は父が病氣の時、責任を感じて實によく働いた。彼が十二の時、酒勾川の土手をなほすため、一戸から一人づつ出て働かなければならなかつた。彼の家では、十二の彼より他に出て働く者はなかつた。彼は出て一心に働いたが、とても大人と一緒に働くことは出来なかつた。それで彼は他の人が休む時も休まず、家へ歸つても夜なべ

酒勾川（サカハガハ）  
静岡縣にある川

一時（イットキ）  
今の二時間

仕事に草鞋をつくつて持つていつて、自分の働きの不足分の補ひをした。併し實際は補ひをする必要はなかつたのだ。休みのない彼の働きは、十二の彼をして大人よりも多くの石を運ばしてゐたから。さういふ彼が決心をしたのだ。彼は益、勇氣が出、愉快になつて來た。

母は一時もたつかたゝない内に歸つて來た。可愛い赤坊を抱いていかにも嬉しさをだつた。

「これで安心した。今日からよくねられる。」

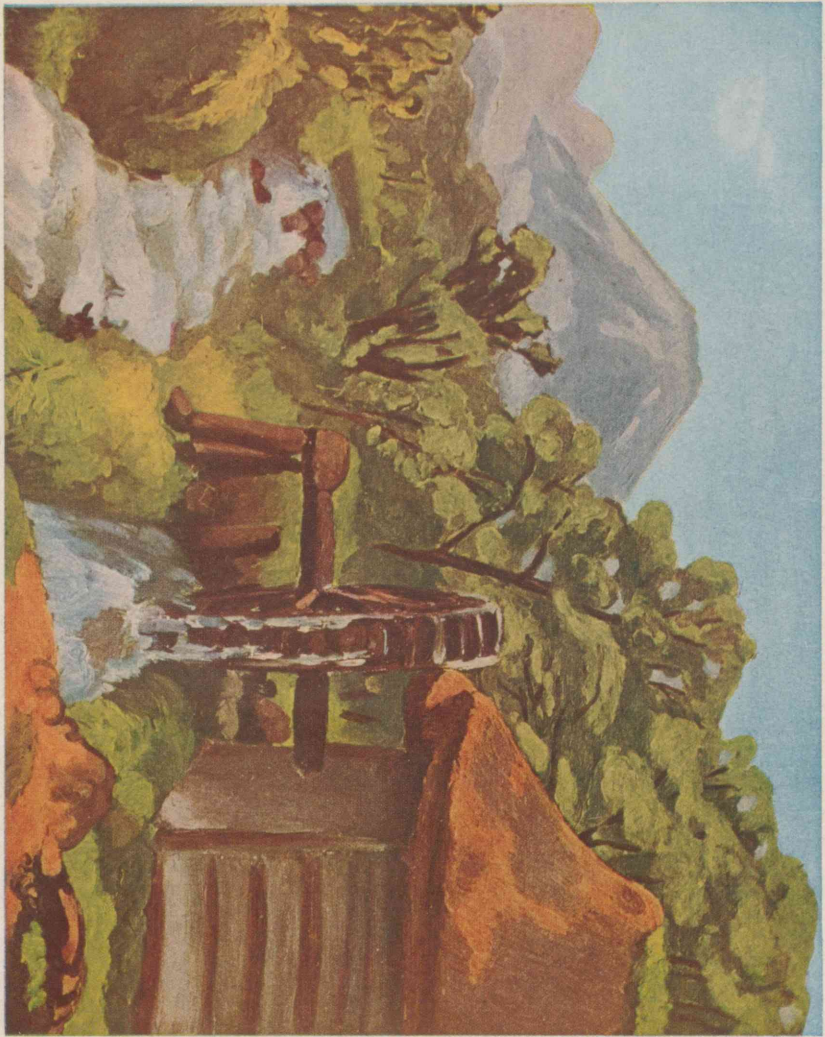
母はさういつた。彼は可愛い、赤坊の弟と、母の喜び顔を見ると嬉しくなつた。益、働いてやらうと決心した。それからの金次郎の働きはいふ迄もなく驚くべきも



のであつた。彼は朝早く起き、そして一里程ある山に行つて柴をかり、薪を伐つては町へ賣りに行つた。そしてその道々、彼は懐に大學を入れては時々出して讀み、又いろく考へるのだつた。

そして夜は繩を緬ひ、草鞋を作つた。その働きぶりにはならぶ者もなかつた。勿論それで貧乏からのがれ出ることは出来なかつたが、彼の決心と勇氣は益、ますますかりであつた。彼は鍛へられるに従つて益、勇氣が出た。彼は一時的の興奮で仕事をすする男ではなかつた。彼は日常の勇士であつた。毎日毎日、勞苦の生活がくり返して來ても彼は益、元氣になり、そして益、勉強した。 (三宮尊徳

徳の  
高い人



筆之克井錦

屋小車水

鈴木鼓村  
宮城縣の人  
音楽研究家

巨刹  
揚雲雀

根芹  
根を食用とする  
芹

午下り



箆(ヲサ)  
機を織る時の道  
具の一

七 自然の音楽

鈴木鼓村

一 野の曲

翠濃い丘陵の際に、巨刹の屋根が見えて、揚雲雀の高く  
囀る日であつた。清い流のせゝらぐ汀に、里の子が根芹  
を摘んでゐる。その小川の土橋を渡つて、日の光もさゝ  
ない藪の中を出かゝると、十戸にも足らぬ草屋が立並ん  
で、野仕事の間の午下りが、朝の如く静かである。  
梨・杏などの木立を隔てて、直径丈にも餘る水車が軋つ  
てゐる。山吹・木蓮の蔭から箆の響も傳はつて来る。雞  
が一聲長閑に鳴き渡ると、椿の花がぼとりと落ちる。桃

旋律

の蔭に牛が鳴く。その間、正しい拍子と長閑な旋律とを以て、ひっそりとした裡に趣ある曲が繰り返される。春の香の沁入るやうな若草にうづくまつて、暫しこの音に聴き入つた。

折から、雷の様な轟きが漸く近づいて、汽車は土手の上を走る。蜿蜒たる列車は長い煙を吐いて過ぎた。暫く破られた幽玄の曲がまた聞かれる。



椿

二 瀑の音

幽玄  
蜿蜒

瀑の音を現した句で、自分の氣に入つてゐるのは、  
あら瀑や満山の若葉皆振ふ  
と云ふ漱石の句である。如何にも鞆鞆たる瀑の音を聞

漱石  
夏目漱石  
三頁上欄参照  
鞆鞆

初裕



(華嚴の瀧)

瀧

くやうで、一種雄大な感に打たれる。  
初裕の軽い旅姿で、喘ぎ喘ぎ細い徑でも上つて往くと、しつとりした若葉の匂が鼻に満ちて来る。汗ばんだ肌も冷りとするので、もう瀑に近づいたな。と思ふと、どつと雷のやうな音が連続し、それが木立

疎密

白簾

八汐(ヤシホ)  
つじの一種  
翠巒

閑寂

芭蕉  
松尾芭蕉  
江戸時代の俳人

や巖石の疎密の加減で、強く聞えたり、また弱く聞えたりする。そのうちに、さつと薄い霧が面を拂ふと、つい數歩前に見上げるばかりの白簾が現れ、巖に激して凄じい響を立てる。そのあたりの青葉若葉は揺ぐばかりである。崖の上には赤い躑躅が照つてゐる。薄紅の八汐の花が翠巒の中にぼつりぼつりと模様をやうに咲いてゐる。

こんな光景が自ら想ひ起される。

おなじ瀑の音でも、何處か閑寂な感じのするのは、彼の

芭蕉翁の

ほろ／＼と山吹散るか瀑の音

といふ句である。

關(タ)けて

不斷の響

雉子

聯想

春が段々關けて、山吹の花は瓣の端が白くなつて、風もないのにほろ／＼と散る。其處らに、餘り大きくない瀑があつて不斷の響を傳へてゐる。その裾には水車もあらう、杉の林もあらう。日は麗かに照つて背中がほか／＼するのて、路傍の石に腰をかけてゐると、雉子が向ふの山際で一聲朗かに鳴く。またしても山吹がほろ／＼と散る。瀑は同じ調子で響いて居る。



翁の句はこんな境地を聯想させる。

耳の趣味

荻原井泉水  
名は藤吉  
東京市の人  
俳人

ハ 新緑の奈良

荻原井泉水

奈良はいつ來ても好いが、殊に新緑の頃が好い。櫻の頃に來た時には、まだ黄いろく枯れたまゝであつた芝は、生きくと青んで、鹿がその上に寝ころんだり、又その青い芽をたべたりしてゐた。

猿澤の池の柳は、萌黄色モウキョウシキをしたその若々しい美しさが、稍老いて、こんもりと葉を茂ら



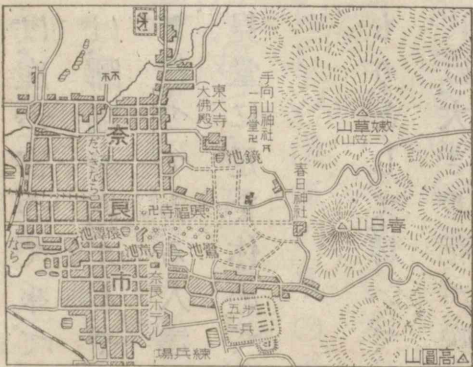
池の澤猿

萌黄色

興福寺  
法相宗の大本山  
藤原鎌足の創建  
南都七大寺の一

しつ水に映つてゐた。春によく來る團體の客のさわめきも、今はなくて、池の縁にあるベンチには、子供を遊ばせてゐる女があるばかりであつた。

荒池のほとりは、なほ静かだつた。奈良ホテルに沿うて、葉櫻の暗いほどの小徑を歩くのも好かつた。池には遠くの興福寺の塔の影が映つてゐた。その水に石を投げて水の輪が出来るのに興じる子供たちもゐた。一つの輪が廣がつてそれが消えてゆくのを待つては、他



圖地近附市良奈

園丁

鷺の池

浮見堂

嫩草山  
高圓山

奈良市の東南方  
にある山

あせび  
馬酔木とも書く  
高さ三米位の常  
緑灌木

の子供が石を投げるのであつた。

梅の木が林をなしてゐる處では、園丁がその枝をおろしてゐた。芝の上に落ちた青葉には、鹿が寄つて来て香を嗅いでゐた。鷺の池のほとりには、躑躅が燃えるやうに咲いてゐた。ボートを浮べて漕ぎ廻つてゐる人達があつて、水の光も夏らしかつた。浮見堂に足を休めてゐると、水を渡る風が快く訪れる。

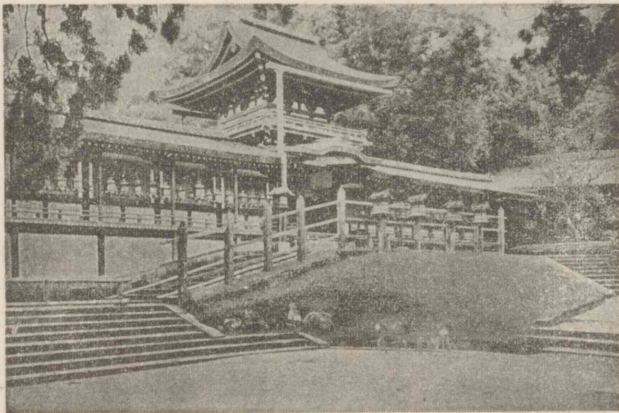
嫩草山・高圓山が、それごとくにこんもりとして輝いてゐた。高畑のからりとした芝生の上には、大きな花が咲いたやうに、美しいバラソルが動いてゐた。あせびの花は大抵すがれてゐたが、その花の多い谷のやうになつた路



春日の社

春日神社  
官幣大社  
武甕槌命・經津  
主命・天兒屋根  
命・比賣命を合  
祀する

せびる  
蹤(ツ)いて



には、美しい影が出来て、こまかく洩れてひそんでゐる光の戯れも面白かつた。

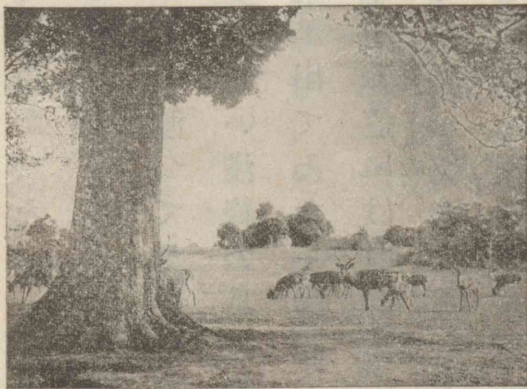
春日神社

春日の社に近い杉の木立は、夏らしく黒み渡つて、その葉の先から愛らしい淺緑の爪のやうな若葉が出てゐた。參詣の人の多く通る道には、鹿が澤山待受けてゐた。私は煎餅を手に持つてゐるだけ、皆與へてしまつたが、彼等は圓々とした可愛い眼を私に向けて、いつまでもせびるやうに蹤いて來

御辭儀

鹿子斑 (カノコ マダラ)

た。一つの鹿は私の前で首を上げたり下げたりした。それは御辭儀なのだつた。私はおとなしく私の前に脚を折つてゐる鹿の背を、犬にでもするやうに撫でてやつた。文字通り、鹿子斑のその肌はつや／＼しかつた。五月は毛並の光澤の一番美しい時だといふ事である。ぬけ換つてまだ間もない角は、やつとY字形になつたばかりで、赤みを帯びて、柔かさうだつた。手に握つてみると、その赤い色の血のぬくみが感じられた。



鹿の園公良奈

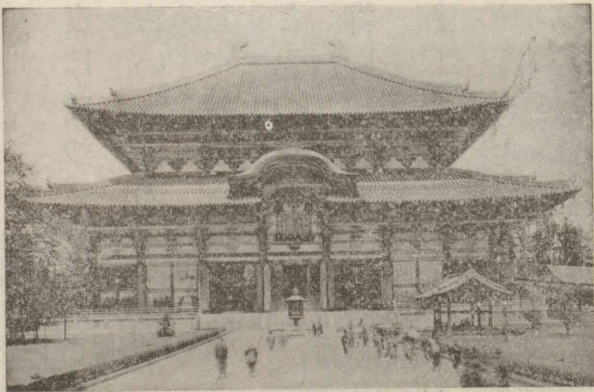
南大門  
東大寺の總門



大佛殿  
東大寺の金堂  
戒壇院  
東大寺に屬する僧侶に戒を授けるための堂  
鴟尾(シビ)  
堂宇の屋上の端に取りつける飾の瓦 下圖参照

南大門の通りには、燕が澤山飛んでゐた。そこらに佇んでゐる鹿の細く高い脚の間を、すり抜けるかと思ふやうに飛んだり、角細工などの土産物を並べてゐる店の軒についと飛入つたりしてゐた。

大佛殿を左へ、松林の間を歩く路の感じも好かつた。草が長く伸びるまゝになつてゐる向ふに、實に古い堂が見える。それは戒壇院らしかつた。顧みると、大佛殿の屋上の鴟尾が金光



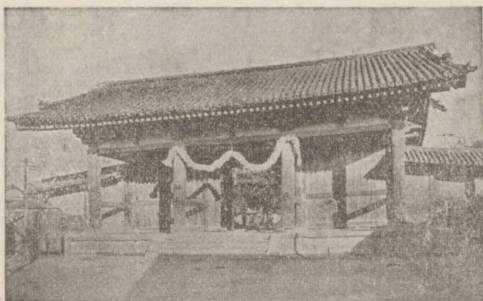
大佛殿

燦爛

燦爛として松の間に高く聳えて、松の梢には蟬がじいじいと鳴きはじめてゐた。

轉害門  
東大寺西北隅の門、佐保路門ともいふ

結構



轉害門

うちでも、最も古いものの一つであるが、その簡素にして雄大な結構は、すばらしいものだと思つた。私はその門をはいつて、大佛殿の裏を歩いた。竹がわつさりと路に垂れてゐたり、柿の若葉が日を照りかへしてゐたりした。古い寺院の土塀が崩れた事によつて、却つて繪畫的に見えるやうな、淋しいひつそりとした道だつた。築地の裾

繪畫的  
築地

きんぽうげ  
金盞花とも書く  
高さ六〇程度の  
多年生草本



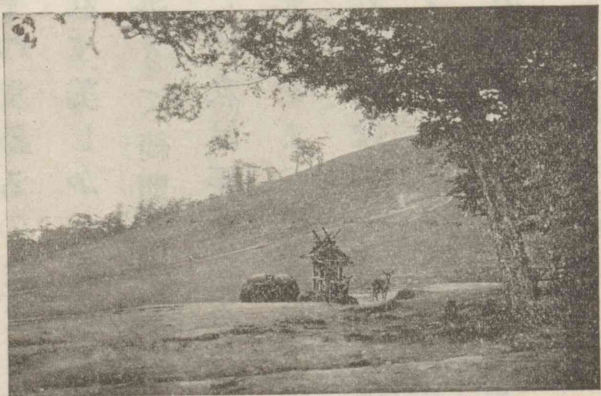
木の芽  
山椒の若芽  
春日山  
嫩草山の南方にある

にはきんぽうげが咲き、白い小さい蝶が休んでゐた。

嫩草山の前の茶亭で晝飯をたべた。木の芽の吸物を出した。

嫩草山と春日山との間にある谿の道は、若葉の緑が顔にうつるやうな、朗かな感じの處であつた。

爪先上りに苦しくないほどの登りになつて、山の奥に踏込んでゆく。洞の楓といふ名のついてゐる通りに、楓がトンネルのやうになつてをり、高い木には藤の花があちらにもこちらにも



嫩草山



亭

咲き垂れてゐた。奈良は藤の花の多い處だが、公園の茶亭のそれなどは、大方すがれてしまつてゐるのに、ここだけはまだふさふさとした紫を垂れて美しかった。歩けばさすがに暑さを感じる。道に沿うて綺麗な流があり、流に臨んで古風な亭がある。そこに私は腰をおろした。青いかまきりの子が、若い薄の葉先にとまつてふらくとしてゐた。奈良の若葉はいゝなと私は今更のやうに思つた。

私は緑の深い中を縫ひながら、あてもなく歩いた。

(観音巡禮)

吉田絃二郎

名は源次郎  
佐賀縣の人  
文學者

水雞(クヒナ)

涉禽類の鳥  
體長二〇厘米位



餘情

遊子

九 初夏

吉田絃二郎

夏の朝、黎明の空のわづかに白みかゝるとともに鳴き出すのは水雞である。遠きが如く、近きが如く、餘情をこめて草の中に鳴く。快い夏の朝の夢をさらに遠く幽玄の世界に誘ふ。

蛙の聲もなつかしい初夏の聲だ。

夜更けてたゞひとり、旅の空に蛙を聴くといふことは、いつになつても心を惹かれる遊子の哀愁だ。

不圖、眞夜中に夢うつゝの境に蛙の音を聴くをりなど、

葦  
禾本科の植物で  
水邊に自生する  
高さ二米位  
行々子(ヨシキリ)  
葦切とも書く  
夏期水邊の葦に  
群棲する小鳥

一しほのわびしさに胸うたれることもある。

葦の間の行々子はいかにも騒々しい鳥である。

けれども白い雲が湧き、

湖畔の葦の青々とかがよ

ふころになれば、行々子の

さわがしい聲もなくては

ならぬものである。

鼓子花の咲く長い土手

の道を歩きつつ、行々子を聴き、遠い白雲を眺めるのは、うれしいものである。わづか、町から半里一里が程をへだ



子々行と葦

籬 景物

てた川のほとりでも、青い葦と行々子の聲と白い雲があれば、旅の心は見出されるものである。

われ十歩歩めば行々子も十歩歩み、われ百歩歩めば行々子も百歩歩みてわれに添うて鳴く。夏のうれしさ、夏のわびしさをこめて鳴く。

草芙蓉の眞つ紅に咲いてゐるのも、捨て難い初夏の景物だ。麥を打つ家の籬に添うて、草芙蓉の咲いては散り布くもあはれである。數年前、箱根を舊街道に沿うて三島に下つた折、草の中にとり残された二三軒の農家の軒を埋める程に紅い草芙蓉の咲いてゐたのを思ひ出す。

しかし初夏の最も美しく、最も心惹かるゝ風物は、何と  
 いつても小雨にまさるものはない。  
 小雨にけふる山丘町水。すべて美しい詩だ。  
 たれこめて窓前の雑草を眺めるだにも、夏の小雨は魂  
 に迫るものをもつてゐる。

睡蓮の花弁に灑ぐ小雨、山路を越ゆる旅人を濡らす小  
 雨、アスファルトの路を湿す小雨。

夏の小雨こそわが魂を濡らす。(小草をさゝぐに據る)

睡蓮(スキレン)

葉は圓形又は卵  
 形で水面に浮び  
 花は白色又は紅色



吉村冬彦

本名寺田寅彦  
 東京市の人  
 理學博士  
 昭和十年歿  
 年五十八

晝顔

鼓子花とも書く  
 蔓性の植物で、  
 夏日午前に淡紅  
 色の花を開き午  
 後は凋む

訓練場

所屬

一〇 花物語

吉村冬彦

一 晝顔

いくつ位の時であつたか、確かには覚えなないが、自分が  
 小さい時の事である。宅の前を流れてゐる濁つた堀川  
 に沿うて、五十メートル位上ると、川は左に折れて舊城の  
 裾の茂みに分け入る。その城に向つた此方の岸に廣い  
 宅地があつた。維新前には、藩の訓練場であつたのが、そ  
 の頃は縣廳の所屬になつたまゝ、荒れ地になつてゐた。  
 一面の砂地に雑草が所まだらに生ひ茂り、處々晝顔が咲  
 いてゐた。近邊の子供は此處を好い場所にして、柵の破

蝙蝠(カウモリ)  
翼手類の動物  
四脚の中、前脚  
には指の間に膜  
があつてよく飛  
ぶことが出来る



反響  
出さかる

れから出入してゐたが咎める者もなかつた。夏の夕方は銘々に長い竹竿を肩にして宅地へ出かける。何處からともなく澤山の蝙蝠が蚊を喰ひに出て、空を低く飛びかはすのを、竹竿を振うては叩き落すのである。風のないうつた様な宵闇に、蝙蝠を呼ぶ聲が對岸の城の石垣に反響して暗い川上に消えて行く。「蝙蝠來い。水吞ましよ。そつちの水にがいぞと、あちらこちらに聲がして、時竹竿の空を切る力ない音がヒューと鳴つてゐる。賑かなやうて言ひ知らぬ淋しさが籠つてゐる。蝙蝠の出さかるのは宵の口で、遅くなるに従つて、一つ減り二つ減り、何處ともなく消えるやうに居なくなつてしまふ。す

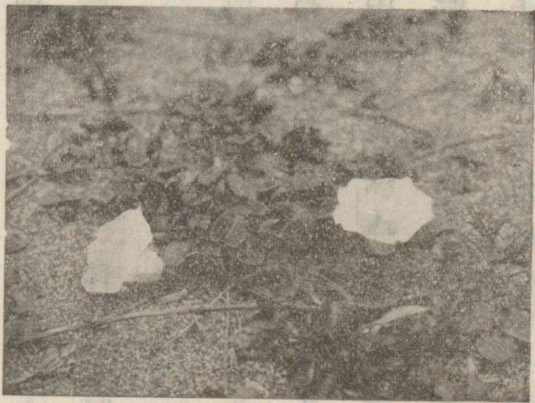
時(ネグラ)

鬱然

ると子供等も散りどくに歸つてゆく。後はしんとして死んだ様な空氣が廣場をとざしてしまふのである。いつか、埒に迷うた蝙蝠を追うて荒地の隅まで行つたが、ふと氣がついて見ると、あたりには誰も居ない。仲間も歸つたか聲もせぬ。城の石垣の上に鬱然と茂つた榎が闇の空に物恐ろしく擴がつて、汀の茂みは眞黒に眠つて居る。足をあげる。と草の露が冷りとする。名狀の出來ぬ暗い恐ろしい感じに襲はれて夢中に駈け出して歸つて來た事もあつた。廣場の片隅に、高く小砂を盛り上げた土堤の様なものがあつた。自分等はこれを天文臺と名づけてゐたが、實

は昔の射的場の弾丸よけの迹シヤブキヨコであつたので時々砂の中  
から長い鉛玉オマリを掘り出す事があ  
つた。

年上の子供はこの砂山によぢ  
登つてはすべり落ちる。時々戦  
争ごつこもやつた。敵軍が天文  
臺の上に軍旗を守つて居ると味  
方が攻め登る。自分もこの軍勢  
の中に加はるのであつたが、どう  
してもこの砂山の頂まで登る事が出来なかつた。  
いつもよく自分をいぢめた年上の者等は、苦もなく駈



顔 畫

嘲る

け上つて、上から弱蟲アサケと嘲る。「早く登つて来い、此處から  
東京が見えるよ」など言つて笑つた。口惜しいので懸命  
に登りかけると、砂は足元から崩れ、力草と頼む晝顔は脆  
くちぎれてすべりおちる。砂山の上から敵軍が手を打  
つて笑つた。

藻掻く

しかし、どうしても登りたいといふ一念は、幼い胸に巢  
をくうた。ある時は夢にこの天文臺を登りかけて、どう  
しても登れず、藻掻いて泣き、母に起され、蒲團フスマの上に坐つ  
てまだ泣いた事さへあつた。「お前は小さいから登れな  
いが、今に大きくなつたら登れますよ。」と母が慰めてくれ  
た。その後自分の一家は國を離れて都へ出た。執着シツカクの

執着

ない子供心には、故郷の事は次第に消えて、晝顔の咲く天文臺もただ夢のやうな影を留めるばかりであつた。

二十年後の今日故郷へ歸つて見ると、この廣場には町の小學校が立派に建つてゐる。大きくなつたら登れると思つた天文臺の砂山は、取り崩されてもう影もない。たゞ昔の面影を留めてなつかしいのは、放課後の庭に遊んでゐる子供等の勇ましさと、柵の根本にかれどに咲いた晝顔の花である。

凌霄花(ノウゼンカヅラ)

落葉木本で高さ一〇米位  
夏、帯黄赤色の花を開く

二 凌霄花

小學時代に一番嫌ひな學科は算術であつた。いつても算術の點數が悪いので、両親は心配して先生を頼んで

夏休み中、その先生の宅へ習ひに行く事になつた。宅から先生の所までは約五百メートルもある。宅の裏門を出て小川に沿うて少し行くと、村はづれへ出る。そこから先生の家の高い松が、近邊の藁屋根や植込の上に聳えて見える。これに凌霄花が下から隙間もなく絡んで美しい。毎日晝前に、母から注意されて、いや／＼ながら出て行く。裏の小川には美しい藻が、澄んだ水底にうねりを打つて揺れて居る。その間を小鮒の群が、白い腹を光らせて時々通る。子供等が丸裸の背や胸に泥を塗つては、小川へ入つてぼち／＼やつてゐる。附木の水車を仕掛けてゐるのもあれば、盪船に乗つて流れて行くのも

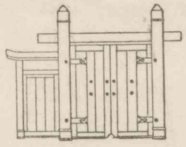
寒竹(カンチク)

竹の一種

庭園に栽培し又  
生籬などにする

冠木門(カブキ)

笠木を柱の上方  
に掛け渡した門



木版刷

一里

約四軒

ある。自分は羨ましい心をおさへて、川沿の岸の草をむしりながら石盤をかへて先生の家へ急ぐ。寒竹の生籬をめぐらした冠木門をはいると、玄關の脇の坪には蓆を敷き並べた上によく藪を干してあつた。玄關から案内を乞ふと、色の黒い奥さんが出て来て、暑いのによう御精が出ますねえ。と言つて座敷へ導く。綺麗に掃除の届いた庭に臨んだ縁側近くに、低い机を出してくれる。先生が出て来て、黙つて床の間の本棚から算術の例題集を出してくれる。横長の黄表紙で、木版刷の古い本であつた。「甲乙二人ノ旅人アリ、甲ハ一時間一里ヲ歩ミ、乙ハ一里半ヲ歩ム……」と言つた様な題を讀んで、その意味を説

欠伸(アクビ)

長押(ナゲシ)

部屋のかまの  
上に裝飾として  
渡す木

明して、これをやつて御覽。といはれる。先生は縁側へ出て欠伸をしたり、勝手の方へ行つて大きな聲で奥さんと話をしたりしてゐる。自分はその問題を前に置いて、石盤のうへで石筆をこつこついはせて考へる。座敷の縁側の軒下に、投網が釣り下げであつて、長押の様なものに釣竿が澤山掛けてある。何時間乙の旅人が甲の旅人に追ひ着くかといふ事がどうしても分らぬ。考へて居ると頭が熱くなる、汗が坐つてゐる脚ににじみ出て、着物のくつつくのが心持が悪い。



花宵凌

頭を押へて庭を見ると、笠松の高い幹には、眞赤な凌霄花が暑さうに咲いてゐる。よい時分に先生が出て来て、どうだ、むつかしいか、どれ」といつて自分の前へ坐る。羅紗切れを丸めた石盤拭きで、隅から隅まで一度拭いて、そろそろ丁寧ていねいに説明してくれる。時々、わかたか、わかたかか。と念をおして聞かれるが、大方それがよく分らぬので、妙たに悲しかつた。俯うつむいて居ると水漬みづじが自然に垂れかかつて来るのを、じつと堪へて居る。いよゝゝ落ちさうになると、思ひ切つてすゝり上げる、これもつらかつた。晝飯時ひるめしが近くなるので、勝手の方では皿鉢はちの音がしたり、物を焼く匂におがしたりする。腹はらの減へるのもつらかつた。

念をおす

水漬

繰り返して教へてくられても、結局あまりよくは分らぬと見ると、先生も悲しさうな聲を、少し高くする事があつた。それが又妙たに悲しかつた。「もうよろしい、又明日おいて」と言はれると、一日の勤とがとも角かくもすんだやうな氣がして、大急おほいそぎで歸つて来る。宅うちでは何も知らぬ母が、色々涼しい御馳走ごちそうをこしらへて待つて居て、汗だらけの顔を冷水で清きよめ、ちやほやされるのが又妙たに悲しかつた。

三 芭蕉の花

晴れ上つて急に暑くなつた。朝から手紙を一通書いたばかりで、何をする元氣もない。何遍も机の前へ坐つて見るが、直ただに苦しくなつて、ついねそべつてしまふ。時



幌蚊帳

時涼しい風が来て、軒のガラスの風鈴が鳴る。床の前には、幌蚊帳の中に、俊坊が顔を眞赤にして枕をはづしてうつむきに寝て居る。縁側へ出て見ると、庭はもう半分陰になつて、陰と日向の境を蟻がうろく出入して居る。

この間、親戚の家から貰つて来たダーリアは、どうしたのか少し芽を出しかけた儘で大きくならぬ。戸袋の前に大きな廣葉を伸ばした芭蕉の中の一株には、今年花が咲いた。大きな厚い花瓣が



筆風草野長

蕉芭

等分

三つ四つ開いたばかりで、とうとう開き切らずに朽ちてしまふのか、もう少し萎びかゝつたやうである。蟻が二三匹たかつて居る。俊坊が急に泣き出したから覗いて見ると、蚊帳の中に坐つて、手足を投げ出して泣いて居る。勝手から妻がとんでくる。坊やは牛乳の罌を投げ出して、膝の上で自分で抱へて、乳首から呼吸もつかずごくごく飲む。涙でくしゃくしゃになつた眼で、兩親の顔を等分に眺めながら飲んでゐる。飲んでしまふと又思ひ出した様に泣き出す。まだ眼が覺めきらぬと見える。妻は俊坊を貢ぶつて縁側に立つ。「芭蕉の花。坊や芭蕉の花が咲きましたよ。それ、大きな花でせう、實が生りますよ。」

あの實はたべられないかしら。」坊やは泣き止んで芭蕉の花を指して「モ、く」といつた。「芭蕉は花が咲くと、それきり枯れてしまふつて、お父ちやま、本當？」「さうだよ、だが人間は花が咲かないでも死んで仕舞ふね。」いつたら妻は「まあ。」といつたきり、背をゆすぶつて居る。坊やが眞似をして「マア」といふ。二人で笑つたら坊やも一緒に笑つた。そしてまた芭蕉の花を指して「モ、く」といつた。  
（明治大正文學全集）

白井喬二  
 本名井上義道  
 横濱市の人

鬼界が島  
 文學者

鹿兒島縣奄美諸島中の一島、法勝寺の僧俊寛は平氏討伐の企てが破れ、治承元年同志藤原成經・平康頼と共にこの島に流され、翌年成經、康頼は赦されたが俊寛だけ島に残された  
 流人（ルニン）  
 鳥羽入り  
 鳥羽は今京都市の一部、ここに成經の父成親の山莊があつた  
 僧都（ソウジ）

二 鬼界が島

白井 喬二

鬼界が島の流人が鳥羽入りをしたと聞いて、急いでこれ等の一行を京の町端れまで出迎へた者があつた。それは、彼の俊寛僧都が子供の時から目をかけてやつた有王といふ童であつた。  
 有王は豫て何の便りも無いので、多少の不審も抱いたが、しかし鬼界が島の流人が赦された以上は、俊寛もその一人であらうと思ひ、息せき切つて駈け付けて來たのだ。然るにその一行の中には俊寛の姿は見當らなかつた。様子を聞いて見ると、一行の世話人らしい人が「俊寛殿は、

赦免

都  
京都

六波羅  
京都市鴨川の東

追赦

特赦

中宮  
高倉天皇の中宮  
建禮門院

去年

治承二年

この人達よりもなほ罪が深いといふので、今度の赦免には御漏れになつたのだと教へてくれた。

有王はすぐに踵を返して、急いで都へ駆け戻つて來た。そして六波羅の邊りに佇んで、それとなく様子を探つて見たが、俊寛の追赦は思ひも及ばなかつた。といふのは、抑も今度の特赦は中宮の安産祈願の爲で、その中宮には既に去年の暮十一月十一日、王子が御誕生遊ばしたのだから、この上赦免の儀がありさうな譯がなかつた。

それと知つて有王は悲歎に沈んだ。

やがて、彼は何か決心したと見えて、俊寛の一人娘が忍び住ひしてゐる山家へ出かけて行つて、

配所

狼藉者

髻カマキリ  
(モトドリ)

「この上は配所鬼界が島へ渡つて、俊寛様の行方を捜し、お慰め致したいと存じます。何かお傳言は御座いませぬか。」

といつた。

俊寛の娘は非常に喜んで、丈に餘る長い手紙を書いて父へことづけた。

有王は直ぐ都を立つて薩摩湯へ着いた。途中で狼藉者に出會つて、着物や持物をすつかり奪はれたが、傳達の手紙だけは髻の中へ隠しておいたのであつた。

船といつても、却々思はしい幸便が無かつた。幾日も幾日も日數を消した擧句、やつと唐の商人船に乗つて、目

的の島へ着く事が出来た。

「あゝ、これが鬼界が島か。」

と、流石の有王も茫然として立ち盡くしてしまつた。

如何に配所の島といつても、これは餘りにひどい荒れ

島だつた。田や畑は愚か、里もなく村もなく、偶に人がゐ

ても言葉が通じないから、全くの無人島も同じ事だつた。

岩を攀ぢ、谷を下り、白雲を踏み、又濱邊に出て潮風に晒

されつつ、幾日もくく探し歩いた。

ある朝、海邊に立つて流石の有王も、途方に暮れてゐる

ところへ、磯傳ひに、蜉蟬かなんかのやうに瘦せ衰へた人

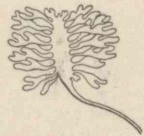
間が、ひよこりくとよるめきながらこつちへ近づいて

晒す

蜉蟬(カゲロコ)

空さま

荒海布(アラメ)  
褐色の海草  
全長一米半位



来た。それはまるで頭の毛は空さまに生ひ茂り、着物は  
絹か布か、見分けもつかぬ程ほろくで、繼目から木の皮  
のやうな肌が露はれ、影の如く足を引きずつてゐる。

よく見ると片手に荒海布を持ち、片手に魚を持つてゐ

るのはどこかで貰つて来たのだらう。かうなつてもま

だ生きようとするのが、寧ろあさましいやうに思はれた。

有王はそれを見て、あゝ、こんな人間の方が却て我が主の

行方を知つてゐるかも知れぬと思つた。そこで近づ

のを待つて

「おゝ、一寸お尋ねいたすが」

と、半ば手眞似で聲をかけて見た。

普通の島人でもなか／＼言葉が通じないのに、こんな乞食のやうな者に易々言葉が通じようとも思はれないので、聲はかけたが、まことに頼りない氣持があつた。

ところが向ふは幽かな言葉で、

「はい……なに、ごと」

と、とぎれ／＼に答へた。有王ははつと驚いて

「おゝ、分るか、うむ、分れば尋ねるが、この島に都から流され給ひし法勝寺の執行俊寛僧都と申さるる方はおいてならぬか。知らば教へてくれ。」

と、思はず大きな聲でどなつた。

すると皆まで聞かず、相手は手に持つた獲物をばつた

執行

り取落した。そして、「わしだ。わしだ」と叫んだ。が、立つてゐるのに堪へられないのか、ばつたり膝を突いて砂の上に打つ伏に倒れて、  
「わしだ、わしだ。わしがその俊寛だ。」  
と叫んだ。

麻幹(マカラ)  
得態

有王は「あつ」と驚いた。この蜉蝣のやうな、麻幹のやうな、得態の知れぬ人間が、主の俊寛様であつたのか。

「おゝ、御師匠様」

といつたきり、有王は呆氣に取られて突立つてゐたが、やがて氣がついて、急いで俊寛を膝の上に抱き起した。俊寛は精神の激動の爲に氣を失つてゐた。

「もし、御師匠様。しつかりして下さい。氣をたしかに持つて下さい。遙々ここまでお訪ねいたしましたこの有王に、なほこの上辛い思ひをさせないで下さいまし。」と、耳に口をあてて呶鳴つた。

その聲が通じたか、俊寛はやつと息を吹き返した。そして有王の顔を下から見上げながら「あゝ、これが夢なら、夢なら、覺めないでくれ。」と呼んだ。

有王は胸が一杯になりながら、「夢ではごさいませぬ。これ、よく御覽下さい。本當の有王でございます。」

と云つて、自分の顔を差し俯向けて見せた。

斷腸

俊寛はつくくと見守りながら、

「あゝ、本當であつた、本當であつた。」

といつて、後は聲も出ない程、身も世もなく打ち喜んだ。

有王はその有様を見ると、一層斷腸の思ひをしながら「でも、よくその姿で御命を延びさせられましたな。」

といつて、今更に不思議がるのであつた。

「それは今年、少將や判官入道達が追つて迎へに參ると申した故、その言葉を信じ、もしやに引かれて、今日まで必死となつて生き永らへて居つたのだ。」

と、俊寛も本當の事を打ち明けて聞かせた。

だが最初の程は、俊寛も自ら山に登つて硫黄を取り、外

露命

國からの商人に頼んで、それを食物と代へたりして、生活を送つてゐたのだが、今ではそんな労働も出来なくなつて、磯に出て網人や釣人達に膝を屈めて魚介を乞ひ、流れ寄る荒海布を噛んで、辛くも露命を繋ぐやうになつてしまつたのであつた。

やがて俊寛は、

「兎に角、有王、わが家に参り、ゆるりと話を致さう。」

といふので、有王も始めて俊寛に一定の住所のあることがわかつた。

俊寛を肩にかけ、その家といふのに辿りついて見ると、松の木の下に竹を柱とし、蘆の穂と松の葉とで上下を取

眷族  
圍繞

高野

和歌山縣伊都郡  
高野山  
眞言宗の本山が  
ある

り纏つた、見るも哀れな、雨露にも堪へぬ住居であつた。

有王は思はず顔をそむけた。

「あゝ、何といふ事でございませう。苟且にも昔法勝寺

の執行として五百人からの従者眷族に圍繞されてゐた

あなた様が、こんな、こんな家に寝起きなさるとは」

さう思ふと、今度は有王の方が夢ではないかと打ち伏して泣き悲しんだ。

有王が渡つて二十三日目に俊寛はとうとう死んだ。

有王は、俊寛僧都の遺骨を首にかけて高野へのほり、奥の院に納め、後世を静かに弔つたといふ話である。

北原白秋

名は隆吉  
福岡縣の人  
詩人  
心柄

二三 歌ごころ

北原白秋

心柄といふものは、ほんのちよつとした言葉の端にも  
あらはれるものである。

葛飾の眞間  
千葉縣市川市  
銚子  
千葉縣銚子市  
利根川口にある  
俗僧

私が一夏住んでゐた葛飾の眞間の寺の坊さんに、或時  
銚子行の川蒸氣の話が出たので、ここから銚子まではよ  
ほどでせうね」と訊くと、「いや、大した賃錢でもありません。」  
と坊さんが答へた。私は里數を訊いたのに、坊さんは大  
變なことを答へたものである。坊さんはこの一言で、飛  
んでもない俗僧であることを私に知らしてしまつた。  
だから、その後、その坊さんが、田圃の蛙が鳴いたら、石

古池や  
江戸時代の俳人  
松尾芭蕉の句

古池や蛙飛びこむ水の音  
大變な違ではないか。

油をぶつかけなさい。といつてくれた親切な言葉にも、私  
はさほどに驚きはしなかつたのである。

小笠原  
小笠原諸島のこ  
と

また或時、或三人の男が膝を交へて坐つてゐた。その  
時、バナナをお盆に山ほど女中が持つて來た。そのバナ  
ナはまだ青かつた。これを見た瞬間に、一人が「はあ、いい  
な。」といつた。一人は「だめぢやないか、青いな。」といつた。  
一人は「全く小笠原のは値ばかり高くてね。」といつた。三  
人とも親しい友だちだつたが、一人は畫家で、一人は商人、  
あとの一人はそのコーヒー店の主人だつた。畫家はそ



の時、色の輝きを観た。商人は味を感じた。そしてその店の主人公は値を考へて、一緒にはつと思つたのである。この中の誰の心が一番尊く磨かれてゐたか。

畫家は無論、輝いた青い色を觀たばかりではあるまい。その輝きの底に潜むバナナの生きた命そのものをも觀とほしたに違ない。

また、かういふことがあつた。

或歌自慢の人が、眞間にたづねて來て、私に歌を見てくれといつた。私はまあ散歩でもしてみようと、一緒に外につれ出したものだ。その人は、途々何かしらしやべくつてゐたやうだが、私は夕方の方の空や、田圃の景色にばかり

繪模様

河楊(カハヤナギ)  
水邊に生ずる落葉喬木で春になると葉に先き立つて花を開く

眺め入つてゐたのである。

まだ赤い夕焼が西の空には残つてゐた。眞間の小川の土手の上を歩いてゐると、ふとその人がしがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると、何といふ可憐な繪模様だつたらう、私は思はず立ちどまつてしまつた。そこには鮮かな裏白の葉の河楊が水の面に揺れてゐた。そのたわんで揺れ動いてゐる一つの枝には、まだ小さな燕の子が一羽とまつてゐた。また一羽來た。枝はいよいよ揺れる。枝の先は水について、波を立ててゐる。燕の子たちは、紅い頬を揃へて、さもしく恐しさうに啼きてゐる。また一羽とまると、枝はいよいよ揺れだした。と

艶々しい

もするとすべり落ちさうになるので、今は必死となつて  
 すがりついてゐる。その艶々しい黒い尾羽、いたいけな  
 啼き聲。それだけでも、可愛いのに、また一羽羽ばたいて、  
 つい近くまではやつて来るが、枝の上の燕の子はそれを  
 見て、あわてて、いけない、いけないと啼く。これ以上とま  
 つては、枝がすつかり水につかつてしまふのである。空  
 の一羽はとまるにはとまられず、寂しさに啼きながら  
 翔つては近寄り、近寄つてはまた翔りだす。  
 その燕に向つて小石を投げたのである。  
 私ははつとしたが、それでも黙つてゐた。寂しい氣持  
 てほゝゑみながら、私はまた何氣なく歩みを續けた。さ

人柄

うして或所までその人を送つて行つてから、さやうなら、  
 またお出でなさい。とわかれの握手をした。それで歌は  
 とうとう見ずじまひである。見なくとも、もうどれだけ  
 の歌かわかつてしまつたのである。無論、どれだけの歌  
 を作る人かもわかつてゐる。  
 なぜか。それは、その一事で、その人の人柄がまだ出来  
 てゐないといふことが、はつきりと私にわかつてしまつ  
 たからである。心が出来なければ歌は出来ない。

一三 恩賜の葡萄酒

静子夫人  
乃木大将夫人  
新宿驛  
現今は雑沓を極  
めてゐるが、三  
十年前には田舎  
じみた小驛であ  
つた。

静子夫人の姪にあたる菊池浅子が、買物に行く途中、新宿驛の東口を出た時、ふとある茶屋の小汚い赤毛布の上に、一人の老將軍が腰掛けてゐるのをみとめた。彼女は、それが「乃木將軍ではないかしら」と直感した。傍に近づいて見ると、間違ひないので、

「叔父様。乃木の叔父様ではございませんか。」

と呼びかけた。其の時、冥想メイカウからでも醒めた様に將軍は、「ウム。」

と應へて、浅子の方を顧みた。彼女は將軍が副官もつれ

ず、唯一人で掛茶屋に休んでゐるのを不審に思つて、

「まあ、何の御用でございますの、叔父様。」

「ウム、その一寸……」

將軍の應へは極めて要領を得ないものであつた。平素の叔父と少し様子が變つてゐるので、

「叔父様、宅まで御出で遊ばせ、叔母様もいらつしやいますから。」

と代々木驛に近い菊池邸キキチに案内しようと試みた。併し將軍は無表情に依然として何か冥想に耽トるやうで、

「いや、儂は此處で好い。」

と應へただけである。ふと見ると、將軍の長い外套のボ

ケツトからは、意外にも葡萄酒の壇がぬつとはみ出してゐる。將軍の左に腰掛けた彼女が、それを押へて、

「叔父様。これ何。」

と低聲で問へば、將軍は俄かに態度をあらためて、いとも嚴肅な口調で、

「恩賜の葡萄酒ぢや。」

と力強く應へ、やがて語をついで、

「今朝、勝典を新橋驛に見送つて、此の恩賜の葡萄酒で離盃を交したのぢやが、今夜保典も高崎から此の新宿を通つて征途に上るので、先刻から儂は此處で待つてをる。保典とも此の恩賜の葡萄酒で別れの盃を汲む心

算ぢや。」

と語られた。淺子は何かしら身のひきしまるやうな感じがした。そして店の様子などを見ながら、

「何か註文なさいましたの、叔父様。」

と低聲で聞くと、將軍は苦笑しながら一寸當惑したやうな口調で、

「ウム、鮓を註文したのぢやよ。」

「叔父様が召上りますの。」

「いや、お前も承知のやうに保典は鮓が好物ぢやつたので、今日の別れに食べさせようと思つて註文したのだよ。アハハハ。」

兄の勝典が今朝早く自邸を辭して征途に上つた時に、その好物の蕎麥を取つて食卓を共にした將軍は、弟の保典とも、その好物の鮓を一緒に食べながら、兄勝典と汲んだ恩賜の葡萄酒で、互に離盃を交して、心おきなく訣別しようとして考へたのである。この爲に、副官をも伴はず、自邸にも歸らず、飄然として唯一人この掛茶屋に休憩して、鮓の註文をしたのである。

淺子は叔父將軍の心を推量して、何とも名狀し難いあの感動にうたれた。親の慈愛の深さを沁々と考へさせられた。それと共に、平素は殆ど子供の事に無頓著のやうに見えた叔父が、我が愛兒の爲に優しい女親も及ばぬ

やうな心遣ひをするのかと涙ぐましくなつた。

實は淺子も今夜新宿驛を通過して出征する保典の爲に、彼の好物の鮓やその他の馳走をこしらへる爲に買物に出たのであつて、菊池邸では保典を迎へる爲のいろいろな準備が進められてゐたのである。そこに將軍を迎へる事は、萬事都合がよかつたので、彼女はいろ／＼と言葉を盡くして叔父に勧めてみたのであつた。新宿驛では、驛長の好意によつて、構内の建物の中に特に一定の場所を選んで、乃木家の爲に送別の小宴を催す設備が用意されてゐるといふ事や、保典少尉の到着は今夜十一時で、それまでまだ時間があるので、菊池邸に休息される事が

好都合である事などを告げて、頻りに來邸を勧めたのであつたが、

「いや儂はまだ見送らねばならぬものもあるので、今日は菊池さんをお訪ねせぬ。何れ後刻お目にかゝるにとぢやらう。お前恐縮ぢやが、近所の果物店に行つて、保典の乗つた列車の人々に蜜柑を十箱届けるやう取計らつてはくれまいか。」

といつて、淺子に贈物のことを頼んで、菊池邸に行くことはきつぱり斷つた。一旦言ひ出したら、いかに言葉を盡くしても、決して承知する叔父でないことを知つてゐる彼女は、

「それでは失禮いたします。蜜柑はすぐにいひつけておきますから、又後程お目にかゝります。」

と別れを告げて、附近の店で買物をして歸つたが、その時將軍の姿はもう茶店には見えなかつた。そして驛の外には、何處から來たのか軍装凛々しい將兵達が右往左往してゐた。保典が新宿驛に到着するまでに、二三回ここを通過する東北からの軍隊があるので、將軍はこれを見送る爲に茶店に休息してゐたのであらう。淺子は、驛のホームに立つて列車を見送つてゐる將軍の姿を心に描きつゝ、家に歸つた。(乃木靜子—宿利冬湖の文に據る)

宿利冬湖  
名は重一  
大分縣の人  
著述家

一四 談話

遺憾

識(シ)らず

傾聽  
敷衍  
話柄

凡そ談話の要は、自他の感情思想を遺憾なく發表しながら、知らず識らずの裡に、趣味や愉快を感じると共に、その目的を遂げることが大切であります。故に相手の談話を傾聽し、その趣意を敷衍して、その席の話柄とするやうに注意することが肝要であります。

人と對話するには、先方と自己との關係をよく考へて、互に敬意を失はぬやう、感情を害せぬやう、相當の言葉を使用することに注意すべきであります。

その言葉遣ひに自他の區別を誤り、自身のことと敬意

寛大

斟酌

卑俗  
殘忍  
悲慘

を用ひ、他人のことに敬語を添へないことが往々あります。すが、これ等は特に注意すべきであります。例へば、我が母のことを、「私のお母様はかやうにお話し下さいました。」と言ひ、他人の親のことを、「あなたの親は大變嚴格にしますね。」などいふが如きは誤であつて、「私の母はこれ〜のことを申しました。」「あなたの御父様は御寛大でいらつしやいますね。」等と言ふべきであります。又、自分より目上の人のことを話す時でも、先方がずつと目上である場合は、敬語を用ひるに當つても斟酌すべきであります。

談話は必要な用談の外、成るべく有益、且、上品にして趣味ある題目を選ぶべきであります。故に卑俗、殘忍、悲慘

な事柄については、成るべく語らないやうに注意すべきであります。

妄りに人の身の上を批評し、又人の衣服器具等に對してかれこれ噂するのは宜しくありません。これを聞く人は己れも亦かく言はれるであらうと思つてよい氣持はしないでありませう。故に居合はさない人の噂の出た時は、その人を辯護するやうに努めねばなりません。

他人の零落や不幸に陥つたことを言ふのは宜しくありません。或は人の不幸に打ち沈んで居る際に、愉快な話をし、又は自分の幸福なことをいふ事は、却つて先方の失意を増すものでありますから、共に注意しなければな

辯護

零落

失意

倦怠

りません。例へば入學試験に失敗した人に向つて、某さんは無事に合格しました。某さんも好成绩で入學しました。あなたは本當にお氣の毒でした。などといふのは宜しくない。「某さんも失敗しました。某さんもしけなかつたさうです。あなただけでは勿論ないので、先方をお力を落さず、大いに發奮して、來年は優等で御入學を祈つてをります。」などといつて、先方の氣を勵ますことが肝要であります。これは單に失敗した人に對してばかりではなく、病人などに對しても亦同様であります。人と談話するに、己れの職業の事のみを語り、又は己れの好む事のみを引き付けようとするのは、人をして倦怠



差出口

せしめるばかりでなく、己れの知識の足りないことを發表すると同様であります。

人と談話する場合は、成るべく相手に話させるやうにし、たとひ自分に興味のない事柄であつても、十分に耳を傾ける位の心掛が必要であります。自分のみ語り續けて人に話させないのは、決して談話上手ではなくて寧ろ失禮であります。又、他の人の話の最中、横から差出口をして、その話の腰を折るやうなことがあつてはなりません。たとひ自分が既に知つてゐる話であつても、他の人の話すことは、熱心に聞くことが大切であります。即ちそれが談話の禮であります。

先後輩

家門  
横勢

談話中、他の人と同時に話の口を切ることがあります。たならば、自分は差控へて、他の人に話をさせるのが禮であります。そして先方から強ひて勧められる時は、自分から先に話しても差支はありません。この場合、主人は客に、後輩は先輩に先を譲るのが普通の例であります。

多數の人が集つて共に談話を交換する場合に、自分と同窓の友人ばかりで、別に一團を作り、同窓に關する事柄のみ話柄にするが如きは、談話が一局部に偏する嫌ひがありますから、他の無關係の人々は、甚だ不愉快を感じるのであります。深く注意せねばなりません。

他人に對して、自己の學術・技藝や家門の權勢などを誇

滑稽  
洒落

話頭

り顔に語る人がありますが、これは慎しむべき事であり、又滑稽洒落等は、時にとつては興を添へることが無いではありませんが、その言ひ方の如何に依つては、人に誤解を與へることがありますから、これも注意しなければなりません。

自分の談話を先方が喜ばないやうである時は、程よく速にその話頭を他に轉ずることが必要であります。又先方が答を憚ることは、強ひて問うてはなりません。要するに、談話は如何なる場合にも禮を失はぬやうに心懸くべきものであります。(新作法要義に據る)

野上彌生子

大分縣の人

文學者

この湖畔

精進湖(シヤウ)

山梨縣西八代郡

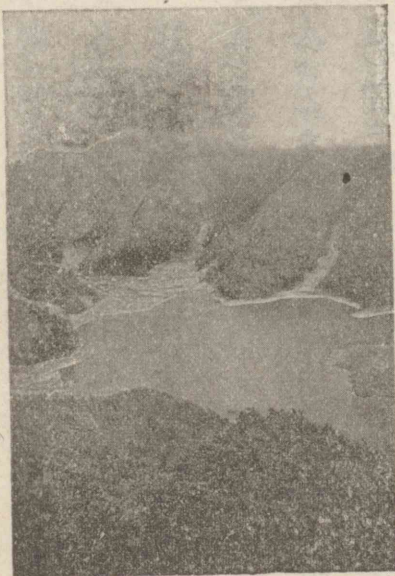
富士五湖の一

魅力的  
夢幻的

一五 精進湖より母へ

野上彌生子

お母様、豫ての計畫通り、私たちはこの夏の一月を、この湖畔で過す爲に、家中へ参りました。今日でちやうど十日になります。この湖の美しさ。殊に富士山を背景にもつた高貴さ。朝と晝と夕方と、夜と時々によつてその魅力を變へて行く夢幻的な姿の美しさは、當分の間、唯私たちをうつとりさせたまきりで



精進湖

した。

無花果  
(イチジク)  
恰好

青木が原  
富士裾野にある  
廣漠たる原生林



海樹の原が木青

(る見りよ端の山連坂御)

一體この精進湖は、富士山のまはりにある多くの湖水のうちでも、一番曲折に富んだ形をもつて、ちやうど一枚の無花果の葉を廣げたやうな恰好をしてゐます。三里に足らぬ周囲の間に、七つの岬と、その數に伴なふだけの入江とがあり、東南に開けた青木が原の森林は、弓

上に富士が眞直に聳えてゐるといふ順序です。その富士と青木が原とを右手に取つて、西の方から一番最初に、且、一番長く湖の中に突出してゐる岬が、ホテルのある岬で、私たちの借りてゐる家は、その岬と次の第二の小さな岬との間に作られてゐる入江を控へた高臺に、砂地の畑を前にして立つてゐます。

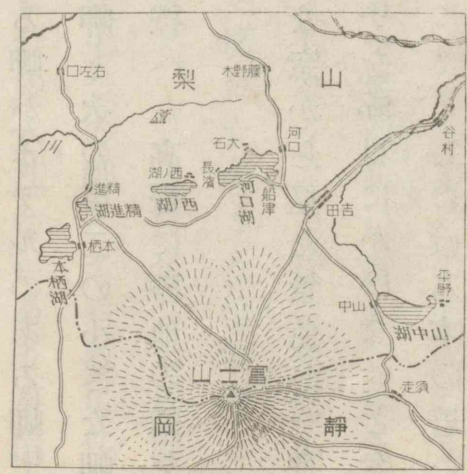
この家では、東に向いた小さな窓から見た景色が、一番勝れてゐます。簡単なスケッチをお目にかけますと、窓の前はちよつとした草地になつて、そこには八本の若い杉が並び立ち、湖はその杉木立の間に何時でも碧い水を湛へて居り、杉木立からはみ出した左右の部分は、右はホ

杉木立(スギコ)  
(ダチ)

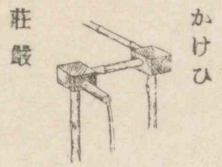
樹海

テルの立つ岬から遠く青木が原の樹海まで續き、左は第二の岬の森が、芝地の傾斜になり、最後に赤褐色の石ころの岸になつた所で限られてゐます。

湖の向側は、約二千尺程の密林で眞青になつた二つの山です。朝日はその左側の方の山の右の肩から出ます。太陽がやがて昇らうとしてまだ現れず、先驅の光線が空の雲と湖とを眞紅に燃す時の輝かしい美しさは、地上の物ではない様な氣が致します。それ



先驅



は大抵四時半です。その頃には私はもう起きて、その小窓の近くに鏡を立てて髪を結ひ、その外側にあるかけひで口をすゝいだり、顔を洗つたりしながら、うつとりとして、その莊嚴な景色に見とれます。さうくお母様、そのかけひの水の事も、私は書きもらしてはならなかつたのでした。それは、上の家の後を流れてゐる谷川から、窓の前の草地にこしらへた小さな池に引入れてある水で、明神澤の清水と言へば、この邊でも名高い、おいしい水なのださうて御座います。冷い事は勿論です。なほ嬉しい事は、湖水までは届かずに、土中にしみこんでしまふくらゐの谷川の流も、この邊ではまだなか〜水量が豊富で、

岩組

絶えず涼しい瀬の音を響かせながら、大きな岩組の間を流れてゐる事です。初めの四五日は、承知して居りながらも、毎朝の様にだまされました。

「おや、雨が降つてゐるのか知ら。かう思つて耳を澄して、次の瞬間にそれと氣がついた時には、何より樂しう御座いました。私はそのたびに、支那の古い詩の中に住んでゐる様な氣がしました。實際日の出前の湖水の眺がどれくらい美しくとも、この谷川と、その水聲と、さうしてそれから分れ落ちるかけひの清水とがなかつたら、この小さな家の魅力は、ずつとそがれることと思ひます。それくらゐこの谷川は、この家とびつたりして居ります。私

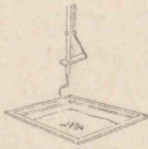


は讀む事にも、書く事にも疲れると、よくほかんとして、この水聲に耳を澄します。川は家の後を流れてゐるばかりでなく、私の身體のうちにも流れこみ、流れぬけてゐるやうな氣が致します。

この小屋の今一つの魅力は、私の机のすぐ後にある小さな爐です。それには古びた自在鍵カギがつるされてあります。私はこの爐に赤く火を燃して、目前の湖水が氷になり、四圍の山々が眞白な雪に覆オホはれてゐる光景を、一冬じつと眺めて暮したいといふ誘惑ソウワクに激しく捕へられて居ります。

お母様、ここまで書いて氣がつくと、私は自分達の内證

自在鍵



誘惑

内證事

假住  
冷淡

事や、假住カリズマヒの家の事ばかりに心を奪はれ、この湖にとつて大事な富士山の美に對して、餘りに冷淡レイタンであつたかと思はれはしないかと恐れます。決してそれどころではないのですから。でも私は、湖を朝から晩まで終日見ない日はなくとも、富士は見ない日が多う御座います。この家の位置は、富士を見る事が出来ませんから。村の人たちは、それをこの明神澤の唯一の缺點として數へる様です。けれども私は、目をあければいやでもその姿が臉オモテの裡に落ちて來る氣易キヤクさよりも、それを見る爲に、家を離れて二三町も足を運ぶとか、湖の中まで船を漕出すかしなければならぬ手数テウを、却つて楽しいものに思つて居り

勿體なさ

紺青(コンジャウ)

精進村  
精進湖東岸の村



精進湖から見た富士

ます。またそれがあつて富士の高貴さが愈増し、特別な勿體モノタガなさで味ははれる様な氣が致します。實際私たちは、朝湖に映る美しい雲を見たり、夕方紺青に暮行く透明トウメイな空を仰いだりするたびに、富士の美しさを想像しては、わざ／＼見に出掛けます。右へ行けばホテルの後の本栖路モトスミチから見事な富士が見られ、左の方では上の家の横から山路傳ツルひに精進村の方へ一二町たどつて行つ

河口湖  
西ノ湖  
本栖湖  
いづれも富士五湖の一  
一〇六頁地圖参照  
白峯(シラネ)  
白根とも書く  
赤石山脈の一峯  
海拔三、八九米  
御嶽(ミタケ)  
山梨縣中巨摩郡  
海拔八七〇米  
神仙境

た所で、すばらしい富士が見られます。けれども富士の眞美と莊嚴とを知る爲には、上の家の前についた小徑を、後の山へ千尺ほど登つた見晴へ行かなければならないさうです。そこでは、富士が河口湖、西湖、精進湖、本栖湖の四つの湖をその裾に輝かしながら、見上げるばかり高く眞直に聳え、反對の空には甲州白峯、御嶽につゞく日本アルプスの一帯が、屏風のやうに連なつて、神仙境のや



見晴台から見た富士

うな美しさを展開してゐるさうです。一兩日のうちに、私たちもその山へ登つてみようと思つてゐます。今日も思ひ立つたのでしたが、雲が多かつたので見合せました。

何れその上で、また出来るだけ委しくその模様をお母様に書いてお送り致しませう。風穴と言つて、青木が原の中にある氷の洞窟の中にはいつた珍しいお話も致したいのですが、それもこの次にと残しました。ではさうなら、御機嫌よくいらつしやませ。

洞窟

前田 晁  
山梨縣の人  
文學者

凭(ヨ)る

未月 書取

一六 手紙の懐かしさ

前 田 晁

手紙といふものほど、あはれに懐かしいものはない。毎日、郵便配達夫の来る時刻になると、窓に凭つてをどる胸を抑へながら、外面をじつと見てゐる人は、澤山あるだらう。

獨りて淋しくてたまらずにゐるやうな時は、勿論のこと、さうでない時でさへも、郵便！といふ高らかな配達夫の聲を玄關の方に當つて聞きでもすると、「幸福」が舞ひ込みでもしたやうな嬉しい心持のするものである。「何處から來たのだらう。」「誰から來たのだらう。」「かういふ考

蔽(オホ)ふ

が忽ち浮かんで來て、その郵便物を手にするまでの楽しさといつたらない。いよゝゝそれを手に取つて、封を切つて見る段になつて、最も嬉しく思はれるのは、やはり何といつても、親友の蔽ひ隠しのない胸を開いたやうな手紙である。しばらく逢はなかつた場合は、勿論のこと、それほどでない時でさへも、心と心と相許した親友同士が、向ひ合つて心の中を語り合ふやうな手紙に接すると、俄に自分





雲散霧消

の胸も開けて来て、先刻までの淋しさなどは、何時の間にか、雲散霧消ウンサンムコウしてしまふ。

不順

遠く故郷を離れてゐる者にとつては、生家からの消息も亦懐かしいものの一つである。「この頃の氣候はどうも不順であるが、その許には別段の障りもないか。こちらら是一家打揃つて無事に暮してゐる。天候が定らぬので作物の出来榮はどうかと思つてゐたが、先づこの分ならば、この先天氣さへ續いたら豊年だらうと思ふ。その邊には何の懸念もなく、その許は専心せんしんに勉強するがよい。」かういふ手紙は大抵きまつた文句を並べることが多いものだが、それでも、それを書いた人が年老いた父

出来榮デキベエ

懸念ケンネン

觀念

親であるとか、優しい母親であるとか、または村の有力者として本當に忙しい長兄であるとかで、自分に親しい筆蹟を見ただけでも、様々なことが故郷といふ觀念カニネンと共に聯想されて来て、他人の手紙などに比すると、幾倍の興味があるか知れない。

ふだんならば、うるさく思ふやうな用事の手紙でさへも、時によると、また久しく待たれたもののやうに嬉しく讀まれることがある。例へば、思ひ疲れて、たゞ茫然としてゐる時などは、さういふ手紙に接したために、自分の立場や周圍を改めて明らかに見やることが出来て、心の緊張を覚え、世間に處して行く上の力と用意とを、更に新た

因循  
姑息

流露

にするやうなことがある。一體人の頭は、時折何等かの刺戟を受けないと、どうかすると次第にぼんやりなつて、終には因循になつたり、姑息になつたりすることがあるもので、こんな場合にも、手紙によつて新しい緊張を覚えることが往々ある。

手紙を受取つた時のかういふ純な喜びを思ふと、私達も亦、こちらからも胸を開いた真情の流露した手紙を書いてやつて、人にも同じ喜びを味はせたいと思ふ。

（生きた文章の道に據る）

有馬頼寧

東京府の人

伯爵

農林大臣

貴族院議員

糧（カテ）

社會組織

有（モ）つて

二七 心の糧

有馬 頼寧

食物が肉體の糧であるやうに、學問は心の糧です。學問は生活の手段を教へはしません。學問が生活の手段になるのは、社會組織の結果によるのです。學問は自己を完成する手段です。人は生きてゆかねばなりません。けれども、たゞ生きてゆくだけでは満足することが出来ません。自己の有つて生れた才能を十分發揮するのになければ、到底満足することは出来ません。何が不幸といつても、教育を受けることの出来ないほど、不幸なことはありません。生きてゆくことの出来ないのも、勿論不

無爲徒食

幸には相違ありませんが、ただ生きてゆくといふことだけならば、必ずしも困難ではありません。

人は生きるために働かねばならないことは、當然過ぎるほど當然なことです。だから目覺めた人は、決して生きるために働くことを厭イひません。世の中には無爲徒食シヨクしてゐる人があります。そして多くの人は、かかる人を最も幸福だといひます。しかし、それがなんで幸福でせう。かりにそれが幸福であるとしても、苟イくも目覺めた人は何でそれを羨アヤみませう。目覺めた人は、働いて生きたいのです。働くことによつて、必ず生きてゆくことの出来る社會の出現を望んでゐるのです。しかし、た

虚ムナし

保障

開放

だ生れて、たゞ働いて、そしてたゞ死んでゆくことを望んではおけません。出来るだけ完全に近い自己の一生を眺めたいのです。不用な財を積んだり、虚ムしい地位を得たりするため、他人を害したり、己を欺いたりすることを何で望みませう。人は皆、美しい心を有つて生れて來てゐます。若し、人々が正しく働くことによつて、生きることに保障ホされ、また、誰もが同じやうな教育を受けることが出来るならば、自己の才能が、他人の才能に劣オることによつて生ずる自己の不幸は、自らこれを諦アめることが出来るのではありませんか。

封建時代の教育が、民衆に開放され、そして、今までは優

比肩

れた才能を有ちながら抑へられてゐた民衆が、十分その才能を伸ばすことの出来るやうになつた時に、日本の文化は、世界の一等國に比肩し得るやうになつたてはありませんか。熟した木の實が地上に落ちれば、温かい土はこれを育み培うて、天をも摩する大木とならせます。そして、それらの樹木は、限りない愛に充ちた大きな自然や、太陽の光と熱の恩恵によつて、その生命を支へてゐます。松も、杉も、檜も、櫟も、互に他の發育を妨げることなしに、あの美しい森林を形づくつてゐます。私達もこのやうに、學問といふ心の糧によつて、他人の自由を妨げることなしに、あくまでも自己を完成させたいと思ひます。

恩恵

正岡子規

名は常規  
愛媛縣の人  
俳人・歌人  
明治三十五年歿  
年三十六

一八 故郷

正岡子規

見聞

ふし

世に故郷ほど戀しきはあらじ。花にも、月にも、喜びにも、悲しみにも、まづ思ひ出でらるるは故郷なり。故郷は、學問を究め、見聞を廣くするの地にあらず。されども故郷には歸りたし。故郷は事業を起し、富貴を得るの地にあらず。されども故郷には住みたし。兩親姉妹あるがために、故郷に歸りたしと思ふもあらん。我は親はらからとも今は故郷にはあらねど、なほ故郷こそ戀しけれ。都にありて世を厭ふがために、故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまでに世を厭ふふしもなく、なほ故郷

はやり氣

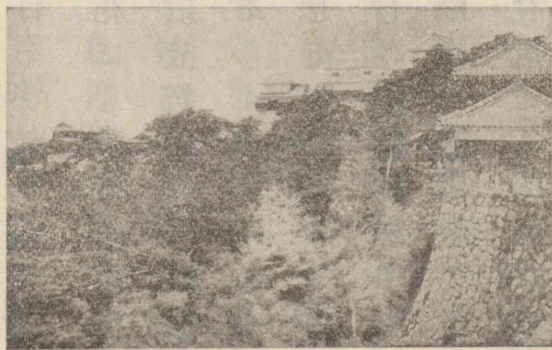
單身

首途(カドデ)

こそ戀しけれ。思へば十餘年の昔はやり氣の抑へがた  
 くて、單身故郷を出て行かんとこそは勇みしか。いざ首  
 途といふに、一滴の熱涙は覺えず頬  
 のあたりに流れ來るを見送りの人  
 に見せじと、顔そむけたる時の苦し  
 さ、何やら胸につかへたる心地なり  
 き。母親の乳房と故郷の土とは離  
 れ憂きものなりけり。

天守閣

故郷近くなれば、城の天守閣こそ  
 まづ目を喜ばす種なれ。低き家、狭  
 き町、淋しき松並木、丈高き稻の穂、鼻のさきに並びたる連



(城山松)

閣守天

莞爾

久潤の情

居睡(キネムリ)

なかくくに

山、幼き頃より見馴れたる一軒家、見るもの皆莞爾として  
 我を迎ふるが如く、いづれ懐かしからぬはなし。まづ身  
 寄りの家をここかしこと訪れて、久潤の情を述べれば、年  
 老いたるば、様の笑聲、瘦せたる叔父御、肥えたる叔母御、  
 居睡する女中の顔さへ、見覺えたるまゝに、少しも變らず。  
 さて變らぬは故郷よと思ふも、歸り着きし瞬間なり。  
 變らぬはめてたけれど、全く變らずば何のおもしろき  
 ことかあらん。變らずと見るうちに、些かながらかれも  
 これも變りゆきたるこそ、なかくくに聞きて見てゆかし  
 けれ。人の上につきて、第一に變りたるは、我が従姉妹の  
 數のふえたと、その人と成りたることなり。「都の人こ

跪く

そ来たまへれ、我もその顔見ん。などひしめきあひ、我が前に跪きて禮を述ぶるもあれば、襖の隙より恥づかしげに窺ふもあり。幼き兒は始めて見たる顔もあり。さらぬ

振分髪

稚子(チゴ)まげ



子規自畫像

も幼な顔のおもかげをおぼろげにとめて、振分髪ウツガミの稚子チゴまげまげに變りたるも少なからず。かつて見し時には、小學讀本を高らかに讀みあげて、誇りかに人に聞かせたる男の子の、今ははや時事を談じ、外國の事情を説くほどになりたるもあり。唐黍トウモロコシの殻にてこしらへたる糰モチを箱の上に並べて、人形遊びに餘念

時事

餘念

得あげず

標札

丁稚(デッチ)

華容  
本意(ホイ)

あいなし

なかりし女の子の、年は嫁ぐべくなりて、我が膝もとに茶を汲みて置きながら、顔も得あげて退きたるなど、思へばかなたよりは、我をも、しかく年とりたりと見るらんと、獨り心に恥づること多かり。

戸の外に出づれば、標札ヒラカせしいかめしき家どもは、大方聞き知らぬ人の名を示せり。幼き時より馴染ナジミになりし本屋は、昔のさまながら、見馴れぬ丁稚デッチは我を十年前の華容クワンとも知らで、よそくしくもてなしたるも本意なく覺ゆ。かねて知りたる道具屋は引越せしか、潰れしか、あらぬ店となりて、淋しかりし武家町の角に、賑々しく商店の軒を並べたるもあいなしや。

菩提所  
檜(シキミ)

三米位の灌木  
枝葉を折つて佛  
前に供へる



粟\*

しばたゝく

いて菩提所に詣でて、久しぶりに檜をも手向けんとたどり行けば、山門半ば崩れて、一條の汽車道はその傍を横ぎれり。あなやと驚きて、少し左に曲れば、數百の墓累累々として、未だ荒れはてしにはあらねど、かの鐵道に隔てられて、寺の境内を離れたれば、父君・祖父君などの墓のうしろは、一步ならぬに粟・黍など秀でたり。一目見るよりも覺えず目をしばたゝきぬ。

粟の穂のこをたゝくなこの墓を

嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。

(子規全集)

一九 小坊主

紹鷗(セウオウ)  
姓は武野  
茶道の宗匠  
弘治元年歿  
年五十二

宗匠  
無雙の譽

その日、堺の紹鷗の家では、茶の客として一貴人を迎へる爲に、朝から忙しかつた。

茶道の宗匠として、當時無雙の譽を得てゐた紹鷗自身が先に立つて、數人の弟子と共に床の飾附、座敷から庭の掃除と、手落なく指圖した。巳の刻頃にすつかり準備が整ひ、何時客を迎へても差支ないばかりになつた。

朝からの疲労と、準備の出來た氣安さとから、紹鷗は縁に坐つて、心靜かに一服した。わざとらしさを嫌ふ紹鷗の好みから、庭には五六本の

背景

箒目

印す

利發

立木と、少數の庭草と庭石とが配置されたのみであつたが、地續きの林が庭の背景となつて、自然に奥深い風情を作つてゐる。今、掃除したばかりなので箒目も鮮かに、初秋の日光にくつきりと樹々の影を印してゐるのが、いかにも明るく氣持よかつた。

紹鷗は満足げにあたりを見廻してゐたが、何か思ひ出したやうに、急に手を鳴らして人を呼んだ。

「誰ぞ居らぬか。」

「はい。」

遙かに返事があつて、ぱたぱたと小さい足音と共に、十一二の、いかにも利發さうな、かはいの小坊主が現れた。

そして紹鷗の姿を見ると、一二間手前でびたりと手をつかへた。拭きぬいた廊下に小坊主の影が涼しく映る。

「お師匠様、何ぞ御用で……。」

「お、そちか。實は特にそちに頼みたい事があつての。」

「は、あの私に……。」

「さうぢや。そちでなうては出来ぬ事ぢやと思ふが……。」

「……そち、御苦勞ぢやが、あの庭を掃除してくれぬかの。」

紹鷗は箒目も鮮かなその庭を指さした。

「あ、あの庭で……。」

小坊主はくるくした眼を見張つた。その庭はたつた今、他の弟子たちと掃除し終つたばかりなのである。



「さうぢや。」

紹鷗は大きく頷いた。



千 「はあ。」

利 小坊主は師の意をはかりかねて、  
休 暫く首をかしげてゐたが、やがて

「承知致しました。」

と、元氣よく立上つた。

ちよこくと庭におりた小坊主  
は、一本の木の下に立つて、暫く梢を  
うち仰いでゐたが、小さい腕に力を  
籠めると、ゆらりくとその木をゆ



横山大観筆

の様子を視て、みた紹鷗は、思はず、おゝと感歎の聲を洩ら  
した。

すぶつた。揺れるにつれて、病葉の  
五六片がはらりと落ちた。箒目  
鮮かな庭に落散つた五六片の病葉  
は、何とも言へぬ風情を添へた。今  
までは餘りに明る過ぎるかと思は  
れた庭も、これによつてぐつと奥深  
いゆかしさが添はつたやうに思は  
れた。

どうすることかと、じつと小坊主

力業(チカラ)

「お師匠様、御掃除を致しましたが。」  
今の力業にばつと頬を赤らめた小坊主は、紹鷗の前に  
つゝましく跪いた。

「お、御苦勞ぢやつた、〜。」

紹鷗はいかにも頼もしげに小坊主を見詰めて、微笑ん  
だ。

この小坊主……これこそ豊太閤の茶道の師として、そ  
の名を海内に謳はれた千利休の幼き日の姿だったので  
ある。

千利休  
名は宗易  
茶道千家流の祖  
天正十九年歿  
年七十一

湯淺常山

名は元禎  
備前の人  
江戸時代の儒者  
天明元年歿  
年七十四

二〇 曾呂利の頓才

湯淺常山

堺の鞘師、始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何  
と申すぞ。」と問はせけるに、答ふるやう「臣が姓名、曾呂利新  
左衛門と申し候。」太閤「さては奇なる姓もあるものかな。  
して、曾呂利と申す姓には、何ぞいはれにてもありつるも  
のか。」と問ひけるに、また答ふるやう「聊かいはれこれあり  
候。別儀にあらず、臣の持へたる鞘堅くして、そろりと入  
りて敢へてつかへず、これを以て曾呂利と申し候。」太閤  
「こは奇なり。また折節来るべし。」他日又太閤に謁しけ  
るに、太閤問うて曰く「汝の姓名は何とか申ししな。」答へ

別儀

申ししな

重言

重問

て曰く、「會呂利、會呂利、新左衛門、新左衛門。」太閤怪しみてその重言を尋ねけるに、新左衛門の答ふるやう、殿下曩に臣の姓名を問ひ、今また重ねて問ひ給ふ。故に臣もまた殿下重問の意に従ひ、同じく重言を以て答へ候なり。」

新左衛門或時太閤に向ひ、願はくば一日御耳の香

を嗅がせられたし。とありければ、太閤は訝しく思ひ、「こやつまた何をかなすらん。」と疑はれしが、何はともあれ宜し、汝がよきに嗅ぐべし。」と許されしかば、諸大名の御機嫌伺



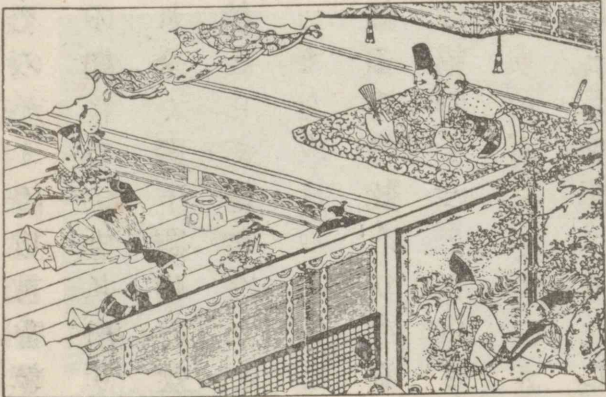
會呂利新左衛門 小林清親筆

面々

讒言

寵愛

ひに出づる時を窺ひ、太閤の耳根に口寄せて何やらいふ



(記問太本繪)

太閤の耳をかぐ

數日にして金銀財寶山の如くあつまりぬ。さて太閤の

體をなす。居あはせたる面々、心中密かに驚き、「かやつ何をいふらん、もしや我を讒言するものにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛するところなれば、かやつがいふ事御用ひあらんもまた測られず」と憂ひ、各、我が邸に歸りて早々數多の金銀財寶を調べて、密かに會呂利が方へ贈りけるにぞ、

效能  
餘席  
呆然

御前に出て、謝していへるやう、殿下一日の御耳を拜借し、そのかうばしき香を嗅ぎたる效能によりて、金銀財寶山の如くあつまり來りて、殆ど坐する餘席これなく候。これ全く殿下御耳の效能なり。」とありければ、太閤もまた呆然として驚きけりとなん。

寡欲

また或日のことなりしが、新左衛門太閤の機嫌を取り、頗るその效ありける程に、太閤の申しけるは、何なりと汝の望むものを取らせん。」とありけるに、新左衛門のいへるやう、「臣、敢へて大いなる望もこれなく候。たゞ紙袋二つほど米を賜はりたし。」太閤、「そはいとゞ易きことなり。あまり寡欲の至ならずや。」と仰せありけるに、新左衛門、「こ

約定(ヤクダヤウ)

近習



(藏館物博室帝京東)

太閤

れにて澤山なり。」と申して退出せしが、やがて二つの紙袋を張抜き、數十百人を雇ひ來りて、太閤の御前に出て、「前日御約定の米これに賜はりたし。」とて、米倉二戸前をおほひたりけるにぞ、さすがの太閤もこれには呆れて、暫し言葉もなかりけるとぞ。また或日のことなりしが、嘗て太閤數多金銀の蟹を鑄造らせ、これを庭の泉水或はその近邊にはなちて娛樂となしけるが、程經て見飽きたりとして近習の者に、「何ぞ一用をいひ出

づる者にはこれを與へん。と申しけるにぞ、皆々大いに喜  
 び、「臣はこれを紙押になさん。」といひ、或は、「臣は、金の茶釜の  
 蓋もなければ、せめてはこれを以て、その蓋の取手になさ  
 ん。」といひ、或はなにといひ、かといひて各、一箇づつ賜はり  
 し中、新左衛門の乞ふやう、「臣は人の角力も既に見飽きし  
 ことなれば、この蟹を集へて角力を致させんと存ずるな  
 り。」といひければ、太閤角力とありては、五箇十箇にてはそ  
 の興薄かるべし。悉く持行くべし。」と、残れる蟹を皆新左  
 衛門に與へけりとなん。その頓才實に驚くべし。

(常山紀談)

常山紀談

一五卷 湯淺常  
山の著 武人の  
功績・逸話約四  
百七十條を載す

徳富蘇峰

名は猪一郎  
熊本縣の人  
貴族院議員  
帝國學士院會員

悲劇

二 靜寛院宮様

徳富蘇峰

靜寛院宮様の御一代は、如何に巧妙な小説家も恐らく  
 は書くことの出来ないほど、人生の所謂悲劇なるものを  
 含んでをります。含んでと云はんよりは、寧ろ悲劇その  
 ものであります。

身は竹の園生の中にお生れ遊ばし、仁孝天皇を御父君  
 に持たせられ、孝明天皇を御兄上に持たせられ、明治天皇  
 を御甥に持ち給ひ、およそ尊きといへばこれほど尊き御  
 方はないのであります。然るに、その御方が普通我々平  
 民さへも享け得るところの家庭の楽しみも、女性として

竹の園生

仁孝天皇

第百二十代

孝明天皇

第百二十一代

明治天皇

第百二十二代

享(ウ)く

の平安なる生活をも享け給ふことが出来ず、長くもなき三十二年を殆ど憂ひ、哀しみ、惱み、苦しみの間に送り給うたことは、如何ばかり御同情申上げてよいか、私は宮様の



筆方輝田池 様宮院寛静

ことを想ひ出すごとに、先だつものは先づ涙であります。

御降誕  
熾仁親王  
(タカヒトシン  
ワウ)

そもく宮様は、弘化三年閏五月十日、仁孝天皇の第八皇女として御降誕遊ばされ、御年六歳の時に有栖川宮に御入門遊ばされて、にをはを學ばせ給ひ、同時に熾仁親王

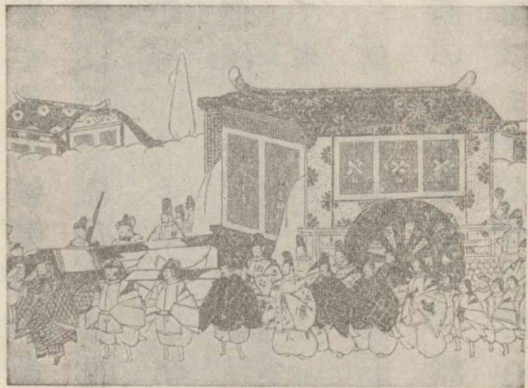
熾仁親王  
(カズノミヤサ  
マ)  
序幕  
ワウ)

の御子、熾仁親王と御婚約をお結び遊ばされました。當時の時世は、改めて申すまでもなく、維新大改革の序幕で、尊王攘夷論の最も流行した時節でありました。ここに於て、幕府側も朝廷側も、ともかく日本のこの國家を維持してゆくには、朝廷と幕府とが合體遊ばされるより他はないといふ意見で、ここに公武合體論なるものが出て來ました。

和宮様  
(カズノミヤサ  
マ)  
靜寛院宮の御降  
嫁前の御宮號  
御降嫁  
奏請  
勅許

萬延元年、和宮様十五歳の御時、幕府はその御降嫁を奏請いたしました。然るに孝明天皇は容易にこれを許し給ひませんでした。幕府は攘夷を實行することを條件にして、重ねて御降嫁の勅許を請願しました。

御發輿



和宮御降嫁の御行列

ここに於てか、和宮様にも、もはや致し方はないと思召し給ひ、熾仁親王との御婚約を斷念遊ばされ、御降嫁の命を奉ずる旨を奉答せられました。かくて宮様は文久元年十月二十日、京都御發輿、翌二年二月十一日、愈十四代將軍家茂と御婚儀を擧げさせられました。時に宮様は御歳十七、家茂もまた十七歳でありました。併しながら、宮様は將軍と共に御暮し遊ばされた間は甚だ少なかつたのであります。即ち家茂は慶應二年

上方

寡婦

薙(きり)

崩御

あぢきなく

徳川慶喜  
徳川十五代將軍

長州征伐のために江戸を發して上方に滞在し、同年七月二十日、二十一歳にて大阪城中で逝いたのであります。されば短き御結婚の生涯により短き家庭の樂しみを得、しかも二十一歳にして寡婦となられた宮様は、その年十二月十九日に御髪を薙り、靜寛院宮と稱せられました。かくて十二月二十五日には、杖とも柱とも頼みたまひし孝明天皇は崩御遊ばされました。かゝる次第でありましたから、如何に宮様は世をあぢきなく思ひ給うたことでありませう。

その翌、慶應三年には、將軍徳川慶喜が大政を奉還し、その翌、明治元年には、伏見鳥羽の變が起り、錦の御旗は堂々

と關東を指し、官軍は東海道中仙道から攻め下つて來ました。

この時に於て、宮様は如何にせられたてありませう。京都に御歸り遊ばすなどは夢にもお思ひになりませんでした。宮様は既に先帝の勅命によつて徳川家の婦とならせられたのであります。ですから、どこまでも御一身の安危を外にして、徳川家のために盡くさねばならぬといふ御誠心を以て、あらゆる事に御骨折遊ばされたのであります。

世間では、江戸城の攻撃中止は、勝・西郷の會見によつて定つたものと申してをります。眞にそれに相違ありま

安危

勝

勝海舟  
名は安芳  
徳川幕府の臣  
明治三十二年歿  
年七十七

西郷

西郷隆盛  
當時大總督參謀  
として幕府の代  
表勝安芳と江戸  
城明渡しについ  
て交渉した  
御直筆

一心一向

惹(と)く

せんが、しかも宮様が如何にこの間に御働き遊ばされたかといふことは、宮様の御直筆の日記が残つてをりますから、それを讀めば、自らその事が明かに解るのであります。かかる大いなることが、二十三歳ばかりの宮様によつて行はれたといふことは、不思議のやうであります。しかも宮様が、一心一向、國のため家のために、誠心をもつて御盡くしになつたことが、自然にかゝる結果を惹き起したのであります。

若し東京市民が、勝海舟・西郷南洲等を恩人と思ふならば、私は、和宮様もまた東京の恩人と思はねばならぬと信じます。のみならず、朝廷が幕府に對して手厚く遊ばし、



悉皆  
歎願

策士

普遍平等

徳川龜之助  
徳川家達  
舊徳川將軍家十  
六代目の主  
公爵  
落着

維新の歴史に誠に有難き光明を添へたのも、悉皆とは申さぬが、半ば宮様の歎願、宮様の御取成しが與つて力あるといふことを、否定できぬのであります。

大なる事を成すのは、必ずしも大なる策士とか、政治家とかいふ人ばかりではありませぬ。苟も誠心あるものが、その位置にあり、自然、誠心に従つて行つたことは、彼にも我にも普遍平等に幸福をもたらすものであります。

宮様のことも即ちその通りであります。

かくて宮様の御骨折によつて、徳川家も駿河で七十萬石を賜はり、徳川龜之助の相續もでき、總てのことが宮様の願ひ通りに落着したから、明治二年正月、宮様は東京を

麻布  
東京市麻布區

増上寺  
東京市芝區  
淨土宗鎮西派の  
本山  
徳川將軍家の菩提所



靜寛院宮様御原

發し、京都にか歸り遊ばされましたが、明治七年、二十九歳の御時、また東京に御移轉になり、麻布の邸に御住居遊ばされました。そして明治十年に脚氣の御氣味で、箱根、塔の澤に轉地遊ばされ、九月二日終に薨去遊ばされました。御歳三十二歳。御遺言によつて増上寺の昭徳院廟所即ち家茂の廟所に葬り奉りました。

宮様のことについては、御日記があり、また消息文もあ

御詠歌

御述懐

りますが、最も宮様の御心を伺ふに足るものは御詠歌であります。御歌は一生御嗜みあつたものと見えて、御秀歌が少くないやうであります。その中でも御述懐の歌などには何ともいへないものがあります。例へば、

惜しまじな君と民とのためならば

身は武藏野の露と消ゆとも

再びはえこそ歸らねゆく水の

清き流は汲みて知りてよ

等、これが二十歳未滿の宮様の御歌であらうとは、誰も思ひ及ばないであります。而して宮様

實に宮様の御一生は悲劇でありました。

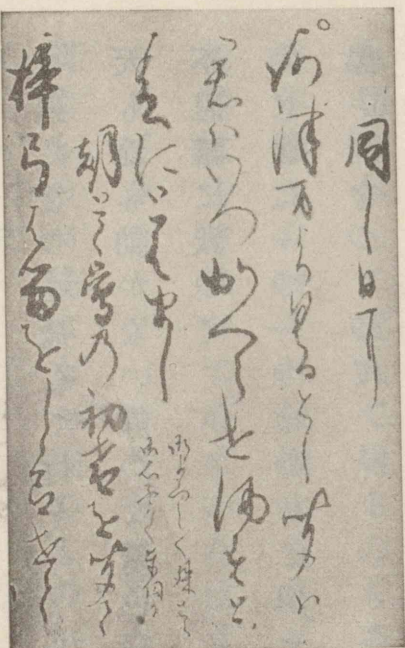
貞操

御筆蹟

あつまよりくる  
とし聞は君はい  
つかへらせませ  
と春にとはまし  
朝とく鶯の  
初音を聞て  
梓弓はるをしら  
せて  
傷(ヤブ)らず  
忿(イカ)らず  
忍従

典型

は婦人の大切なる貞操を完うし、己のために生活せず、他



静寛院宮様御筆蹟

のもののために生活するといふ奉仕的精神、しかも哀しんで傷らず、恨んで忿らず、運命に忍従して、よくその守る

ところを徹底したことに至つては、實に千古を貫き、萬世に亘つて、わが大和民族の典型たる女性と申上ぐべき御方のお一人であると信ずるのであります。

(日本名婦傳に據る)

千家元麿  
東京市の人  
詩人

二二 雁

千家元麿

暖かい静かな夕方の空を  
 百羽ばかりの雁が  
 一列になつて飛んで行く。  
 天も地も動かない静かな景色の中を、  
 不思議に黙つて  
 同じ様に一つ一つせつせと羽を動かして  
 黒い列をつくつて  
 静かに音も立てずに横切つてゆく。

側へ行つたら翅の音が騒がしいのだらう、  
 息切れがして疲れて居るのもあるのだらう。  
 だが地上にはそれは聞えない。  
 彼等は皆が黙つて、心でいたはり合ひ、助け合つて飛  
 んでゆく。  
 前のものが後になり、後のものが前になり  
 心が心を助けて、せつせつせつせと  
 勇ましく飛んで行く。

その中には、親子もあらう、兄弟姉妹も友人もあるにち

がひない。

この、空気も柔いて、静かな風のない

夕方の空を選んで、

一團になつて飛んで行く

暖かい一團の心よ。

天も地も動かない静けさの中を

汝ばかりが動いてゆく。

黙つてすてきな早さで

見て居るうちに通り過ぎてしまふ。

(現代日本文學全集)

汝(オマヘ)

薄田泣菫

名は淳介  
岡山縣の人  
詩人・隨筆家

蓑蟲

樹木の葉を綴つて  
その中で越冬し、  
初夏の頃蛹となり、  
ついで成蟲となる

三 蓑 蟲

薄 田 泣 菫

九月初めだといふのに、秋に感じやすい庭の櫻の葉は、  
もうそろそろ黄ばみかゝり、少し風が吹く日には、氣短に  
も次から次へと散つていつた。

葉ずくなになつた櫻の小枝にとりすがり、ひよくりひ  
よくりとしきりに頭をふつてゐるものがある。よく見  
るとそれは蓑蟲で、彼はせつせと葉を齧つてゐるのだ。

「氣早な蓑蟲だな。今から冬支度をするなんて。」

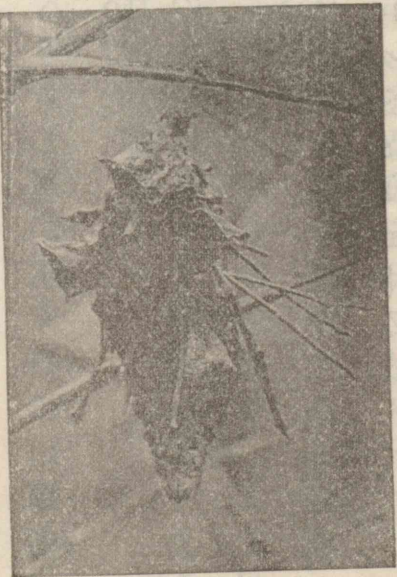
私は口の中で獨語をいひながら、蓑蟲をしてこんな  
に性急にも冬籠の用意にとりかゝらせた周囲の環境を

性急  
環境

獨語(ヒトリゴト)

氣紛れ

思つた。櫻の木に棲んで、その葉を餌とし、おまけにその枯葉を縫ひ綴つて、一冬の寒さを凌ぎの料とすることをのみ知つてゐる蓑蟲にとつては、氣紛れて、ひと一倍感じ易い櫻の葉は、自分の一生を托するにしては、信賴の出来かねる相手に相違ない。で、かうして用心深くも今のうちから冬支度にかゝつてゐるのだ。蓑蟲はひもじいものが食にありついたやうに、息をも



蓑 蟲

あくせく  
紺碧

山口素堂  
名は信章  
甲斐の人  
享保元年没  
年七十五  
おぼつかなし

つかず口を動かしてゐる。外には新鮮すぎる程の陽光が充ち溢れ、草といふ草の下葉には、酒のしたゝりのやうな露が光つてゐる。初秋の風物は、多くのものに詩情を植ゑつける。蓑蟲よ。そんなに葉つばをかじることのみにあくせくしないで、たまには晴れきつた紺碧の空を鳥のやうに飛んでゐる、あの白雲のちぎれでも見入つたらどうだ。

むかし俳人山口素堂は、  
「蓑蟲。蓑蟲。聲のおぼつかなくて、且無能なるをあはれむ。」

といつた。なるほど、秋の蟲はみんないつばしの藝人ぞ

つくつく法師  
蟬の一種で最も  
小型である



飄逸

鉦叩(カネタ、キ)  
一類位の小昆蟲  
秋、樹下又は枯  
葉の間で、鉦を  
叩くやうに鳴く  
響蟲  
直翅類の昆蟲  
體長雌は約四糎  
雄は約三糎位  
檻樓片(ボロギレ)

ろひだ。今もそこらの立木に来て、  
「つくつく法師、  
つくつく法師、  
.....」

と、さも現世をあきらめ切つた藝人のやうに、ひとしきり  
飄逸な歌を歌つて、またいづことも知らず飛んでいつた  
あのつくつく法師や、木の又枝で念佛行者のやうにちん  
ちんと行ひすましてゐる鉦叩や、がちやく〜空騒ぎをし  
て、静かな秋の夜を攪亂する響蟲に比べてみても、蓑蟲が  
あまりに藝のなさ過ぎるのは、ほんたうの事だ。彼は物  
貫ひのやうに檻樓片を身に纏つて、日がな一日、ぼり〜

と微かな齒音をたてて、そこらの葉つばをかじるのに餘  
念がない。

そして立て續けに、そこらの木の葉を腹一杯食べあさ  
ると、手近の小枝に自らの巢をしつかと結びつけるのだ。  
秋から冬にかけて、度々おとづれて来る無慈悲な横なぐ  
りの雨風に、あぶなく吹き飛ばされないやうに。

飽食の後に、やがて長い睡眠が、そつとおとづれて来る。  
物をたべるほかには、何の能もない虫の上に。――

(獨樂園)

無慈悲

飽食

二四 動物の表情

雑居

可笑味(ヲカシミ)



猿

猿が澤山、雑居してゐる處で、よく注意して彼等の動作を觀察すると、種々な表情をする。彼等は確かに、可笑味といふ感じを持つてゐるやうである。しかしその可笑味の感じは、人間のやうに顔に表はれて來ないが、動作の上で表はされてゐるやうに思はれる。即ち口邊を細かく動かして、仲間のやる動作をちつと見てゐる。

又、猿は得意と失意の情を遺憾なく表す場合がある。

例へば猿が雑居して居るところへ、一箇の鏡を投げ與へると、するとそれを拾ひ取つた猿はその鏡をもつて、自分の顔を寫しては、妙な顔をしてじつと見入り、如何にも不思議さうに眺めてゐる。そして、その鏡を他のものに奪はれまいと、右左を見廻し、嬉しさうにきやつくと鳴聲を立てる。これに引換へて、鏡を得ることの出來なかつた猿は、鏡を持つてゐる猿の側へ行つて、如何にも欲しさうな表情をして、うらめしさうに見てゐる。

犬や猫は動作の上で表情をする。犬は尾を振り、猫は咽喉をごろごろ鳴らす。猫が咽喉を鳴らすのは嬉しい

時の表情で、絶対に自分の身體が安全である時にも、咽喉を鳴らすのである。

猫と同じなのは、虎や豹である。

私は河馬のお婿さんを迎へに朝鮮に行つたことがある。その動物園に猫位の豹が、三米位の鎖でつながれてゐたが、始終餌をやつてゐる男が行くと、まるで猫がじやれるやうに喜んで、洋服のズボンなどにじやれついたり、裾をくはへたり、又猫のやうに咽喉を鳴らしたりしてゐた。



豹

河馬のお婿さん  
を迎へに  
筆者は元東京上  
野動物園長であ  
つた

私が行くと、初めて見た見馴れない人間だものだから、眼を丸くして逃げ廻つてゐたけれども、二三日も経つと、すつかり馴染になつてしまつて、飛びついてじやれたり、咽喉を鳴らしたりするやうになつた。

上野動物園で飼つてある虎も、始終餌を與へてゐる者や、馴染になつてゐる私が、檻の側に行くと、のそ〜とやつて来て、ごろつごろつと太い聲で咽喉を鳴らす。又檻の内側の所へごろりと横になつて、丁度猫が人にじやれるやうな恰好をする。そして、私に檻の中に手を入れて、頭でも撫でて呉れと言はぬばかりの親しみを見せる。併しかういふ時に、若し檻の中に手を入れて、頭を撫でて

上野動物園  
東京市下谷區上  
野公園内にある



危害

やつても、彼等の満足する程のことをしてやらないと、飛んでもない危害を加へられないとも限らない。又、危害を加へる積りで無くとも、嬉しさの餘り、猫がじやれるやうに、じやれつかれ、腕などを過つて噛まれたら大變である。

獅子は、虎のやうに、ごろつごろつと太い聲で咽喉を鳴らすやうなことはないが、眼つきが如何にも愛くるしく、人なつかしい態度をする。

概して虎でも獅子でも、年齢の若いのは、馴染のある人



虎

が、檻の側に行くと、懐かしさうに寄つて来て、檻の柵を頭で押しついたり、ごろりと寝轉んだりして、嬉しいといふ表情をする。

何かの本で、獅子や虎が笑つてゐる寫真だといふのを見たことがある。獅子や虎が大きく口を開いて、頭を上げて居るところを撮影したものであつたと記憶してゐるが、口の邊りの表情が、如何にも笑つてゐるやうに、寫つてあつた。しかしこれは人間から見、獅子や虎が笑つてゐるらしく思つただけで、果して獅子や虎自身は、笑つてゐるのか、欠伸をしてゐるのか、獅子や虎でなければわからない譯である。〔黒川義太郎著、動物談叢に據る〕

欠伸

橋南谿

名は春暉

江戸時代の醫者

隨筆家

文化二年歿

年五十三

白石

宮城縣刈田郡

一里半

約六軒

才川

齋川とも書く

近年の凶作

天明四年の饑饉

をさす

本尊

二五 甲冑堂

橋南谿

奥州白石の城下より一里半南に才川といふ驛あり。この才川の町末に高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、この寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も住せず、あき寺となり、本尊だに何方へ取納めしにや、寺には見えぬ。庭は草深く、誠に狐・梟のすみかといふも餘りあり。この寺中にまた一つの小堂あり。俗に甲冑堂といふ。堂の書付には故將堂とあり。大きき纒かに二間四方ばかりの小堂なり。本尊だに右の如くなれば、この小堂の破損はいふまでもなし。やうく縁

佐藤繼信

源義經の臣

文治元年義經の

身代りとなつて

死んだ

年二十八

佐藤忠信

繼信の弟

義經の臣

文治二年京都で

歿した

年二十六

鎌倉殿

源頼朝をさす

秀衡

姓は藤原

陸奥平泉に館が

あつた

一の谷

兵庫縣武庫郡

屋島

香川縣木田郡

龜井

名は六郎重清

片岡

名は八郎爲春

能登殿

能登守平教經

にあがり見るに、内に佛とてもなく、唯婦人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。「いかなる人の像にや」と尋ぬるに、佐藤繼信・忠信二人の妻なりとかや。その昔、義經、鎌倉殿の義兵を擧げ給ふを聞き、秀衡に暇を乞ひして鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤庄司、我が子の繼信・忠信を御供に出せり。その後、義經京都へ攻め上り、平家を追ひ落とし、一の谷、屋島などにて、さばかりの大功をたて給ひて、再度奥州へ來り給ひし時、初め附き従ひて出でたりし龜井・片岡など皆無事にて歸國せしに、繼信は屋島にて能登殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて義の爲に命を落とし、兄弟二人とも他國の土となりて形見のみ歸りしを、母な

形見

推量

凱陣

る人かなしみ歎きて、無事に歸り來る人を見るにつけて、  
 「せめては一人なりともこの人々の如く歸りなば、」など泣  
 き沈みぬるを、兄弟の妻女その心根を推量し、我が夫の甲  
 冑を着し、長刀を  
 脇ばさみ、勇まし  
 げに出て立ち、唯  
 今兄弟凱陣せし。」  
 とその倂を學び、  
 老母に見せ、その心を慰めしとぞ。その頃の人も二人の  
 婦人の孝心をあはれに思ひしにや、その姿を木像に刻み  
 て残し置きしとなり。



筆崎香口谷 妻の信忠・信繼

希代

落涙

香花(カウゲ)

散錢

東遊記

五卷 橋南翁著  
 天明四年から六  
 年にかけて東海  
 東山北陸を旅行  
 して得た奇事異  
 聞集

嗚呼、兄弟の人は古今ためし少き忠義武勇の士なり。  
 その人に連れそひし婦人また希代の孝女にて、夫婦忠孝  
 の勝れしも世に珍しきことなり。余この物語を聞き、そ  
 の像を拜するに、そるるに落涙せり。かくばかり人の鑑  
 ともなるべき孝婦の像の、かく荒れはてたる小堂に雨風  
 をだに防ぎかねて、彩色も落ち失せ、僧だに守らで、香花を  
 供する人もなく、年月に荒れ行き、終には跡かたもなくな  
 りはて、これ等の事をも語り傳ふる人もなくならんを、誰  
 ありてあはれといひて、一錢の散錢をだに供する人もな  
 きは、世にも忠孝に感ずる人の少きにや。餘りにあはれ  
 に覚えしかば、委しく書きつけて歸れり。(東遊記)

辻永  
東京府の人  
洋画家

二六 秋草の花

辻

永

美しさはとにかく、野山の花として、その風情あること、趣あること、またその優しさに於ては、秋の花はすべて春や夏の花よりはすぐれてゐるやうに思ふ。

撫子・藤袴・萩・薄・桔梗・女郎花  
右に葛を加へて  
秋の七草といふ

撫子・藤袴・萩・薄・桔梗・女郎花、いづれを見ても優しく和やかでないものはない。そしてまた、これ等の秋咲く花の色も、單純に強烈な赤色のものは割合に少く、紫色や黄や白が多いことも、また彼等を優しくしつとりとしたものに思はせる一つの原因であらう。野山の花でなく、在來の園藝の植物としても、秋の色をひとりて占めるばかり

單純

雁來紅(ガンラ)  
イコウラ  
葉雞頭ともいふ

清冷

の雁來紅やコスモスのやうなものでも、その優しさに於ては、遙かに春の草花にまさつてゐる。

萬葉の昔  
萬葉集の歌の詠  
まれた時代  
主に奈良朝時代

殊に清冷そのものといふやうな秋の朝露に濡つた野や山に、匂ひ咲く花のしほらしさは又格別で、到底春には見られぬ特殊の美しさである。されば萬葉の昔より、先人もこの美しさに寄せた感懷は、また極めて切なるものがある。

灌木

愛(メ)づ

しかし私はまたこれ等の草や灌木の花よりも——晩秋霜に逢つて、黄や紅にもみぢするその葉色の美しさは別として——秋になつて美しく實る草や灌木の果實の美しさ優しさを、花にもまして深く愛てながめるもので

對生

葉腋

逍遙

可憐

ある。

初夏の頃、美しい小さな淡紫色の四裂した花を、對生の



葉腋

むさらきしきぶ

葉腋に澤山つけるむらさきしきぶ、それは我が邦の各所に自生する灌木ではあるが、その花のころは割合に人の眼にもとまらず、秋になつて美しい紫色の光つた小粒の

珠を澤山綴るやうになると、近郊を逍遙する人、さては山野に狩する人々の眼を大いに楽しませるのである。まことに、この落葉灌木の花のころの姿も可憐であるには

漿果

實(ダ)にヤ

圖案

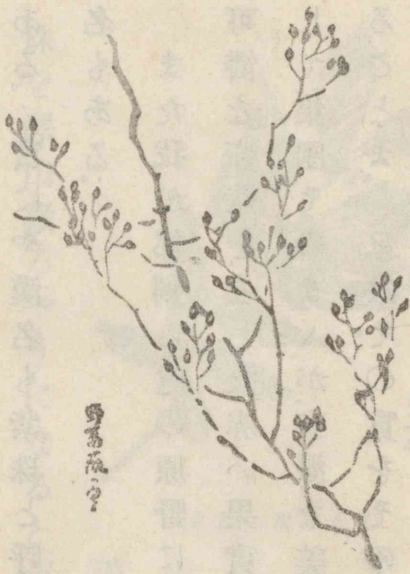
花梗

相違ないが、その結ばれた小さな漿果が、秋になつて紫色を呈する可憐な美しさに至つては、まづたく形容の外である。實にヤ漢名も紫珠と呼ばれ、和名に「みむらさき」の名もある。

また我が邦到る處の原野に分布する野薔薇の、小さな可憐な壺状をなした赤い果實の集團。何とやさしく、そして集團そのまゝが、立派な美しい圖案を形づくつて居ることよ。私はその實をそのまゝ寫して、請はるるまゝに、繪羽織の模様にも用ひて見たし、又帶の模様にも用ひたことがある。それはまことに小さな赤い壺状の實が、すく〜と細い花梗によつて刺のある小枝につながつ

寵

てゐるのである。私の畫室には、去年の秋、富士山の裾野の山中湖畔から採つて來た實の澤山ついてゐる二枝が、赤い支那の花籠に挿されて、いまだに私の寵をうけつゝ



野薔薇

野 薔 薇

けてゐる。私の家の同じ花籠に、矢張り私の寵を等しくうけて居る今一つの果實は、かつて私が越前東尋坊海岸の松林中で採つた「さるとりいばら」の實である。まことこの實は、野薔薇のそれに比しては頗る大形で、大凡七八箇のやゝ扁平

東尋坊  
福井縣北部の海岸にある名勝地

珊瑚の簪

紅熟

渴を醫する

色の交響樂

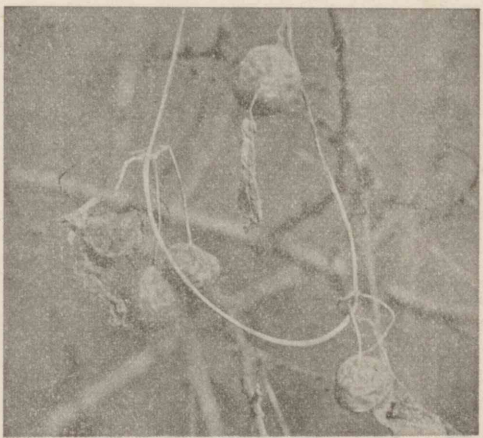
な大きな球が一塊をなして、まさしく美しい珊瑚の簪である。初夏の頃に咲く黄色の小花は、さして美しいものではなく、只雌雄異花で、その雌花が結んだ漿果が、即ち秋に至つて珊瑚のやうに紅熟するのである。しかもこの美しい珊瑚の實を、山民は時に採つて食して渴を醫することさへある。



野葡萄

また山野隨所に生ふる野葡萄の蔓の一枝に、碧紫・紅・白・綠等の色が混交して、美しい色の交響樂を奏せるのなど

は、まつたく秋にしてはじめて味はふことの出来るものである。



黄烏瓜の花

繁殖力  
旺盛

盛なので、東京近郊などでも「やぶからし」などとも稱され、農家の人からは厭がられるが、畫材としては面白い。そ

その他秋の郊外、山野到るところの竹藪や、杉の木等に赤い果實を垂れる烏瓜、又黄色い果實の黄烏瓜は、共に夏の頃に花

瓜 烏 黄  
瓣の先端に恰も白髯のもつれたやうな美しい白花を開く。

この草は繁殖力が極めて旺

小品

たまづさ

(玉章)

むすびじやう

(結び状)

の花の時もさることながら、秋の果實の頃を殊に私は愛する。去年の秋など、それを畫題に幾點かの小品を描いた。烏瓜の名は、この果實を烏が好んで食するので、その名があるのであらう。別に「たまづさ」「むすびじやう」などの名がある。その果實の中にある黒い種子の形狀が、それ等によく似てゐるところから來てゐる。



なばんがひ

原野または墓地等に  
よく咲くものに「ひがんなばん」がある。有毒の植物で、そのあくどいまでの紅い花の色は、まこと

異數

嘔吐  
痲痺

しびとばな

(死人花)

うれいばな

(幽霊花)

ぢごくばな

(地獄花)

てんがいばな

(天蓋花)

まんじゆしやげ

(蔓珠沙華)

に秋の花としては異數である。むべなるかな、この花の地下莖には苦味の猛毒があつて、これを噛めば舌が曲つて言語を發することが出來ぬやうになり、また誤つて花を口に入れると嘔吐を催し、下痢を起し、中樞神經が痲痺して遂に死を致すことさへあるといはれる。従つてこの花にはあまり良い名がついてゐない。「しびとばな」「うれいばな」「ぢごくばな」と呼ばれる。又「てんがいばな」「まんじゆしやげ」等の名もある。(中央公論所載の文に據る)

二七 御仁愛に泣く

それは去年の夏の或日の事でした。主人は大通りのハリ―薬局へ仕事に行つてゐて、家には私と母と、末子の三歳になるすみ子とが留守をしてゐました。午後四時半か五時頃でしたらうか、次男正義を連れて遊びに行つてゐた長男が、

「大變だ〜。お母さん、早く来て。」

と泣きながら駈けて來たので、

「何です騒々しい。……どうしたんですか。」

といふと、



「正ちゃんが自動車に轢かれたよ！」

といふのです。私はびつくりして急に目の先が眞暗になり、直ぐには立ち上れない位でしたが、わあ／＼泣くすみ子を抱へて表通りへ走つて行きました。

大通りへ出て見ると、其處に立派な自動車が停つてゐて、中から子供の泣き聲が聞えて來ます。周圍には、もう十五六人も人が立つてゐましたが、私の方へ駈け寄らうとしますと、運轉手らしい人が近づいて來て何か言ひましたが、そんな事は少しも耳に入りません。

駈け寄つて見ると、子供はわあ／＼泣き叫びながら、自動車の中で一人の紳士に抱かれてゐました。その側に

軍服を召した若い將校さんが腰を掛け、何かしら私に仰しやいましたが、逆せ上つてゐた私には何も聞き取れませんでした。たゞ一目見ただけでも、自動車は立派だし、將校さんに何處となく犯し難い氣品がありましたので、「これは、餘程身分の高い御方だな」と思ひました。

私は子供の傷口を見ようとしました。すると抱いてゐた紳士が、左の足をまくつて見せてくれました。土にまみれて穢くなつた足が、氣味悪く少し脹れてゐました。けれども血が一滴も出てゐません。

「大したことはないと思ふが、兎に角醫者に見て貰ひませう。」

三軒茶屋  
東京市世田谷區  
にある

と紳士が言ひました。すると將校さんが、運轉手に、  
「早く病院へやれ。一番近い病院は何處か。」  
と仰しやいました。それで近所の人に聞き、三軒茶屋の  
方にある世田ヶ谷病院へ行くことにしました。すると、  
將校さんは、  
「お母さんもこの車に乗つて下さい。」  
と仰しやるので、遠慮せずに、すみ子を抱いて自動車に乗  
りましたら、  
「すみません。」  
と仰しやいました。本當に濟まないやうなお顔をしてい  
らつしやいました。そして、子供の頭を撫でたり、手を取

つたりなさいまして、  
「坊や、痛いか……勘忍しておくれ、坊や。」  
といふやうな事を仰しやいました。すると運轉手の方  
が、

「突然、道の真中へ飛び出して來たから、急にブレーキを  
かけたのですが、道の真中で轉んでしまつたものです  
から、急停車しても間に合ひませんでした。…轉びさへ  
しなければ何でもなかつたんですけれど。」  
と言ひました。

間もなく世田ヶ谷病院へ着きました。  
お醫者様は直ぐ出て來て診て下さいましたが、子供が

ブレーキ  
制動機・齒止

餘り痛がるものですからよく診る事が出来ません。  
「内出血ぐらゐで濟めばよいが、骨折をしてゐなければ  
いいですがね。」

と言つて、取り敢へず水だか薬だかで足を洗つてくれま  
した。もうその頃には足は大分腫れてゐました。膝小  
僧の下の所がどす黒くなつて、氣味が悪いやうでした。  
すると將校さんは、診察室の中までおいでになつていら  
つしやいましたか、

「レントゲンで見ではどうか。早くレントゲンをかけ  
るがよい。」  
と仰しやいました。院長さんも、

レントゲン  
獨逸の物理學者  
レントゲンの發  
明したエツキス  
光線のこと  
これによつて人  
體内部の状態を  
寫眞にとること  
ができる

「さうです。レントゲンで見なければ、よく判りません。  
といひました。私はレントゲンがどんなものか知りま  
せんけれども、何でもレントゲンさへかければ治りが早  
いのだらうと思ひましたので、

「早くそのレントゲンをかけて下さい。」  
と申しました。すると子供も私同様レントゲンさへか  
ければ痛みが止ると思つたのでせう。

「レントゲンだあ！レントゲンだあ！」  
と言つて泣きます。  
レントゲンは直ぐかけられました。ところが一向痛  
みが止らないものですから、子供は一層わあ／＼泣きま

す。その聲に怯えて、下のすみ子までがわあ〜泣き出すといふ騒ぎで、全くもう困つてしまひました。

「心配しなくてもよい。ぢき直るから。」

院長はさう申されましたが、どうせ一時の氣休めだらうと思ひました。

「子供は直りが早いからな。二週間もたてば元の身體になるよ。」

「本當に大丈夫かね！」

將校さんは院長に訊ねていらつしやいました。

「大丈夫です。子供の骨なんか、春に接木をするやうなもので、わけはありません。」

「さうですか。十分手當をしてやつてくれ給へ。」

それから將校さんは、私にも、  
「ほんとに濟みませんでした。どうかお大事に。」

さう仰しやいまして、紳士を残してお歸りになりました。

その頃はもう夕闇が迫つてゐました。残つた紳士は、丁寧に、色々と言葉をかけて下さいましたが、主人に是非逢つて詫びをいひたいからといはれるので、家を教へると、自動車で行かれました。

主人は、その日は、餘り遠くない所にあるバリー藥局へ仕事に行つてゐましたので、母が迎へに行くと、事件を聞

いて、一足違ひで先に家へ歸つたとのこと。そこでもう一度自動車を家の方へ返して來ると、町角に立つてゐたさうです。其處で紳士は、主人を車に乗せて、また病院へ歸つて來ました。紳士は、それから暫く病院にゐられ、夜更けてからお歸りになりました。

私共は後に残つて、子供の寢顔を見つめてゐますと、その夜中近い頃の事です。病室へ世田ヶ谷署の署長さんが巡査を連れて入つて來られました。そして、いきなり「お前達は、えらい事をやつたな。……あの方を誰方だと思ふ……勿體ないことだ。北白川宮殿下だよ。」私はそれを聞いた時はつと呼吸がとまるやうな氣が

しました。一瞬間、子供の事も何もすーつと頭から消えて行つて、思はず床板の上へ坐つてしまひました。昔なら、遠くから拜んだゞけでも眼が潰れると言ふ程のものだ。えらい災難に遭つて氣の毒は氣の毒だが、宮様にごきく／＼に抱かれたり、お言葉を頂戴したりするなんて、こんな勿體ないことはない。光榮に思はんければいかんぞ。……實にどうも、勿體ないことだ。この子はとんだ果報者だよ。」私達はそれを聞いて、何もいふ事は出來ませんでした。本當に勿體ないと思つただけで、後は頭がぼーつとして、何も考へられませんでした。涙が何時の間にかこぼれ

て來ました。

私は知らぬことゝは言へ、自分のはしたなさが、つくづく思ひ出されるやうな氣がしました。どんな事をし、どんな事を申したか知りませんが、さぞはしたない事をしたらうと思ひます。非常の場合とはいへ名もない貧乏人の植木屋風情の家内が、宮様と同じ自動車に乗るなんて、畏多くて身體が縮みあがるかも知れませんが、然も何度となく親しくお言葉を賜り、御丁寧なお詫びのお言葉さへ頂戴するなんて、なんといふ果報者でせう。私ばかりではありません、子供なんかは——子供だからまるで見さかひもありませんが、お車の中へ抱き入れられ、

勿體なくも宮様のお膝を枕にし、宮様に度々頭や手を撫でて戴き、……まあ、なんといふ果報者でせう。

これは後で子供から聞いた話ですが、子供が轢かれると同時に、宮様は、わざ／＼御車からお降りになり、泥まみれになつて轉んでゐる子供を従者の方と、一緒に抱き起し給ひ、お優しい言葉をおかけになりながら、勿體なくも、著物の泥を御自らお拂ひ下すつたさうでございませう。そればかりでなく、従者の方にお手をお貸しになつて、御車の中へ子供をお運びになつたさうでございませう。私は氣も顛倒してゐましたから、一向氣がつかまenseんでしたが、宮様の御手袋は、そのために、さぞかし穢れたこととて

ございませう。また、宮様のお膝やお洋服は、そのために、さぞかし泥にまみれたこととございませう。何といふ勿體ないこととせうか。子供も私も、罰が當つて、よくもまあ眼が潰れないことだと不思議に思ふ程でございませう。

宮様がお情深くあらせられる事は、その後の數々の御心遣を拜するにつけても、愈々深く仰がれるのでございませう。

正義は、十七八日間入院してゐましたが、その間、病院の先生初め皆様が大變よくして下さいます。私共には勿體ないことばかり。これと言ふのもみな、宮様が「十分に

手當をしてやつてくれ」と院長に仰しやつたればこそでございませう。そればかりではございませぬ。或時は結構なお菓子を下さいましたし、或時は繪本やサーベルを下さいました。然も洩れ承りますれば、それ等はみな宮様が「子供の喜びさうなものを」といふので、お手づからお選び下さいましたさうでございませう。御使者の方は、毎日のやうにお出でになり、運轉手さんも、立派な果物を持つて、わざわざ見舞つて下さいました。お使者の方のお言葉を伺ひますと、宮様には「治療の経過はどうか」と毎日お尋ねになりましたさうでございまして、或時の如きは、御自身見舞に行くと仰しやつてお聞きにならなかつた

のを、それでは却つて迷惑するでせうからといつて、お側の方々が強ひてお止め申したさうでございます。かうしたお情深い宮様の御徳に天も感じたのでございませうか、さしもの大怪我も、半月程で大體直り、折れた骨もほゞ完全に附きましたので、十七八日目かに退院いたしました。尤も、まだギブスをはめて居りまして、退院後も一ヶ月餘りは病院へ通ひました。一時は跛にでもなるかと心配したのが、何の不自由もない身になりました。たことは、全く宮様の御恩と深く、感泣してをります。  
(聖恩に咽ぶ人々―榎本なみ女謹話に據る。)

ギブス  
 ギブス 繃帯とい  
 つてギブス 粉  
 (石膏末)を含ま  
 せた繃帯

終

日常最も誤り易い假名遣

(●印は特に注意を要するもの)

動詞 ぬる(居)……………鳥が鳴いてゐる (いるは誤)  
 います(在)……………父いますが如し (おますは誤)  
 いらつしやる……………書齋にいらつしやいます (おらつしやいは誤)  
 まゐる……………行つてまゐります(まゐりますは誤)  
 ございませう……………左様でございます(ございませうは誤)  
 ゑる(居)……………本を讀んでゑる (おるは誤)  
 助動詞 まい……………雨は降つてはなまい (なまひは誤)  
 らしい……………雪がふり出したらしい(らしひは誤)  
 ず(打消)……………我は知らず (知らづは誤)  
 よう(未來)……………すぐ起きよう (起きやうは誤)  
 やう(様)……………花のやうに美しい(花のようには誤)  
 助詞 は……………私は歸ります (私わは誤)  
 へ……………學校へ行く (學校えは誤)

を……………花を見る (花おは誤)  
 をや……………況や……………をや (おやは誤)  
 さへ……………雨さへ降つて來た (雨さえは誤)  
 わい……………中々上手だわい (わひは誤)  
 かう……………かう不勉強では困る (こうは誤)  
 さう……………うれしさうだ (そうは誤)  
 ………………さうして置いた (そうしては誤)  
 そう(層)……………一そう勉強した (一さうは誤)  
 もう……………もう歸らう (まうは誤)  
 つひに……………つひに降伏した (つひには誤)  
 つい……………つい忘れてゐた (つひは誤)  
 たとへ……………たとへ死んでも退かぬ(たとえは誤)  
 たとひ……………たとひ死んでも退かぬ(たといは誤)



(i) 1

語の頭では次にあげた以外の語には「い」を用ひる。		語の間・語の末では次にあげた以外の語には「い」と發音する時、ひを用ひることは全くない。	
語の頭では次にあげた以外の語には「い」を用ひる	語の間・語の末では次にあげた以外の語には「い」と發音する時、ひを用ひることは全くない。	語の間・語の末では次にあげた以外の語には「い」と發音する時、ひを用ひることは全くない。	語の間・語の末では次にあげた以外の語には「い」と發音する時、ひを用ひることは全くない。
あひ(藍)	あひさ(紫陽花)	あひさ(紫陽花)	あひさ(紫陽花)
いぬ(乾)(戌亥)	うな(鴨居)	いぬ(乾)(戌亥)	いぬ(乾)(戌亥)
かた(鴨居)	かた(鴨居)	かた(鴨居)	かた(鴨居)
くも(雲居)	くも(雲居)	くも(雲居)	くも(雲居)
くら(位)(座居)	くら(位)(座居)	くら(位)(座居)	くら(位)(座居)
くわ(慈姑)	くわ(慈姑)	くわ(慈姑)	くわ(慈姑)
しき(敷居)	しき(敷居)	しき(敷居)	しき(敷居)
しば(敷居)	しば(敷居)	しば(敷居)	しば(敷居)
せ(所爲)	せ(所爲)	せ(所爲)	せ(所爲)
と(宿直)(殿居)	と(宿直)(殿居)	と(宿直)(殿居)	と(宿直)(殿居)
とり(鳥居)	とり(鳥居)	とり(鳥居)	とり(鳥居)
な(地盤)	な(地盤)	な(地盤)	な(地盤)
ひき(牽)(引居)	ひき(牽)(引居)	ひき(牽)(引居)	ひき(牽)(引居)
ふ(荒)	ふ(荒)	ふ(荒)	ふ(荒)
ま(團樂)(團居)	ま(團樂)(團居)	ま(團樂)(團居)	ま(團樂)(團居)
ま(参)(目居)	ま(参)(目居)	ま(参)(目居)	ま(参)(目居)
ま(本居)	ま(本居)	ま(本居)	ま(本居)
もち(用)(持)	もち(用)(持)	もち(用)(持)	もち(用)(持)
あ(朝寝)	あ(朝寝)	あ(朝寝)	あ(朝寝)
お(老)	お(老)	お(老)	お(老)
む(報)	む(報)	む(報)	む(報)
しい(四時)	しい(四時)	しい(四時)	しい(四時)
しい(詩歌)	しい(詩歌)	しい(詩歌)	しい(詩歌)
次(如く音便にてきしがいとなるもの)	次(如く音便にてきしがいとなるもの)	次(如く音便にてきしがいとなるもの)	次(如く音便にてきしがいとなるもの)
かい(權)(掻かき)	かい(權)(掻かき)	かい(權)(掻かき)	かい(權)(掻かき)
かう(筭)(髪掻かみかき)	かう(筭)(髪掻かみかき)	かう(筭)(髪掻かみかき)	かう(筭)(髪掻かみかき)
き(后)	き(后)	き(后)	き(后)
さい(幸)	さい(幸)	さい(幸)	さい(幸)
さい(玉)	さい(玉)	さい(玉)	さい(玉)
さい(松明)	さい(松明)	さい(松明)	さい(松明)
つ(朔)	つ(朔)	つ(朔)	つ(朔)
つ(立)	つ(立)	つ(立)	つ(立)
つ(次手)	つ(次手)	つ(次手)	つ(次手)
ひ(築地)	ひ(築地)	ひ(築地)	ひ(築地)
ひ(最良)	ひ(最良)	ひ(最良)	ひ(最良)
や(焼刃)	や(焼刃)	や(焼刃)	や(焼刃)
さい(咲きて)	さい(咲きて)	さい(咲きて)	さい(咲きて)
か(書きて)	か(書きて)	か(書きて)	か(書きて)
と(解きて)	と(解きて)	と(解きて)	と(解きて)
う(美しい)	う(美しい)	う(美しい)	う(美しい)
う(嬉し)	う(嬉し)	う(嬉し)	う(嬉し)
た(高き)	た(高き)	た(高き)	た(高き)
お(重し)	お(重し)	お(重し)	お(重し)
か(悲し)	か(悲し)	か(悲し)	か(悲し)
は(早し)	は(早し)	は(早し)	は(早し)
形容詞	形容詞	形容詞	形容詞
連體形	連體形	連體形	連體形
終止形	終止形	終止形	終止形

(e) 1

語の頭では次にあげた以外の語には「え」を用ひる。		語の間・語の末では次にあげた以外の語には「え」と發音する時、へを用ひることは全くない。	
語の頭では次にあげた以外の語には「え」を用ひる	語の間・語の末では次にあげた以外の語には「え」と發音する時、へを用ひることは全くない。	語の間・語の末では次にあげた以外の語には「え」と發音する時、へを用ひることは全くない。	語の間・語の末では次にあげた以外の語には「え」と發音する時、へを用ひることは全くない。
え(畫)	え(畫)	え(畫)	え(畫)
え(笑顏)	え(笑顏)	え(笑顏)	え(笑顏)
え(盤)	え(盤)	え(盤)	え(盤)
え(割)	え(割)	え(割)	え(割)
え(餅)	え(餅)	え(餅)	え(餅)
え(餅差)	え(餅差)	え(餅差)	え(餅差)
え(嘔吐)	え(嘔吐)	え(嘔吐)	え(嘔吐)
え(笑壺)	え(笑壺)	え(笑壺)	え(笑壺)
え(彩)	え(彩)	え(彩)	え(彩)
え(繪具)	え(繪具)	え(繪具)	え(繪具)
え(醉)	え(醉)	え(醉)	え(醉)
え(烏帽子)	え(烏帽子)	え(烏帽子)	え(烏帽子)
え(繪馬)	え(繪馬)	え(繪馬)	え(繪馬)
え(笑)	え(笑)	え(笑)	え(笑)
え(彫・鏤)	え(彫・鏤)	え(彫・鏤)	え(彫・鏤)
え(ゆ・槐)	え(ゆ・槐)	え(ゆ・槐)	え(ゆ・槐)
え(植)	え(植)	え(植)	え(植)
え(植木)	え(植木)	え(植木)	え(植木)
え(植込)	え(植込)	え(植込)	え(植込)
え(聲)	え(聲)	え(聲)	え(聲)
え(木末)	え(木末)	え(木末)	え(木末)
え(据)	え(据)	え(据)	え(据)
え(陶器)	え(陶器)	え(陶器)	え(陶器)
え(杖)	え(杖)	え(杖)	え(杖)
え(巴)	え(巴)	え(巴)	え(巴)
え(所以)	え(所以)	え(所以)	え(所以)
え(甘)	え(甘)	え(甘)	え(甘)
え(癒)	え(癒)	え(癒)	え(癒)
え(入江)	え(入江)	え(入江)	え(入江)
え(覺)	え(覺)	え(覺)	え(覺)
え(開)	え(開)	え(開)	え(開)
え(越)	え(越)	え(越)	え(越)
え(肥)	え(肥)	え(肥)	え(肥)
え(凍)	え(凍)	え(凍)	え(凍)
え(榮蝶)	え(榮蝶)	え(榮蝶)	え(榮蝶)
え(下枝)	え(下枝)	え(下枝)	え(下枝)
え(籠)	え(籠)	え(籠)	え(籠)
え(絶)	え(絶)	え(絶)	え(絶)
え(土の兄)	え(土の兄)	え(土の兄)	え(土の兄)
え(長柄)	え(長柄)	え(長柄)	え(長柄)
え(鴉)	え(鴉)	え(鴉)	え(鴉)
え(吮)	え(吮)	え(吮)	え(吮)
え(榮)	え(榮)	え(榮)	え(榮)
え(映)	え(映)	え(映)	え(映)
え(生)	え(生)	え(生)	え(生)
え(稗)	え(稗)	え(稗)	え(稗)
え(青)	え(青)	え(青)	え(青)
え(螺鈿)	え(螺鈿)	え(螺鈿)	え(螺鈿)
え(魚)	え(魚)	え(魚)	え(魚)
え(功)	え(功)	え(功)	え(功)
え(魚)	え(魚)	え(魚)	え(魚)
え(鯉)	え(鯉)	え(鯉)	え(鯉)
え(蠶)	え(蠶)	え(蠶)	え(蠶)
え(口惜)	え(口惜)	え(口惜)	え(口惜)
え(仰)	え(仰)	え(仰)	え(仰)
え(扇)	え(扇)	え(扇)	え(扇)
え(葵)	え(葵)	え(葵)	え(葵)
え(棟・檜)	え(棟・檜)	え(棟・檜)	え(棟・檜)
え(近江)	え(近江)	え(近江)	え(近江)
え(燭)	え(燭)	え(燭)	え(燭)
え(陽炎)	え(陽炎)	え(陽炎)	え(陽炎)
え(昨日)	え(昨日)	え(昨日)	え(昨日)



(zi) ジ

ち・じ

かぢ(鍛冶)(金打)  
きぢ(生地)  
くぢら(鯨)  
こうぢ(麴)  
こうぢ(小路)  
ことぢ(琴柱)  
すぢ(筋)

すぢみち(筋道)  
とぢ(綴)  
とぢる(閉・鎖)  
なんぢ(汝)  
なめくぢ(蛞蝓)  
ねぢ(銀・旋螺)  
ねぢける(拗)

ねぢる(捩)  
はぢ(恥)  
ひぢ(臂)  
ひぢ(泥)  
ふぢ(藤)  
ふぢ(かま)(藤袴・簡)  
もみぢ(紅葉)

よぢる(攀)  
わらぢ(草鞋)  
をぢ(伯父・叔父・小父)  
みそぢ(三十)  
よそぢ(四十)  
いそぢ(五十)  
むそぢ(六十)  
等十を数へる古語

(zu) ス

づ・ず

ずす(誦)  
ずるし(狡猾)  
すぢ(鈴)  
すぢ(錫)  
すぢき(鱸)  
すぢし(生絹)  
すぢし(涼し)  
すぢしろ(蘿蔔)  
すぢな(菘)  
すぢむ(涼)  
すぢめ(雀)

すぢり(硯)  
すぢる(漫)  
あんず(杏)  
いしずる(礎)  
かぢ(數)  
かならず(必)  
きぢ(傷・疵・瑕)  
くぢ(葛)  
こぢる(梢)  
たゝすまひ(様子)  
たゝすむ(行)

なずらふ(準)  
ねぢみ(鼠)  
はぢ(管)  
はぢみ(機)  
ひぢむ(歪)  
まぢ(交・雜・混)  
みぢ(蚯蚓)  
もぢ(鴉・百舌)  
やはぢ(矢筈)  
ゆぢ(柚子)  
ゆはぢ(弭)

りんず(綸子)  
さ變の濁れるもの  
感ず 任ず 重んず  
疎んず 輕んず 語んず  
嘆ず 損ず……等々  
(注意)  
1. つの下にくる時はづを用ひる。  
(例、つづみ・つづく・つづる)  
2. すの下にくる時はずを用ひる。  
(例、すすり・すすめ・すすむ)

語の頭・語の間・語の末共次にあげた以外の語にはづを用ひる。

本 讀 新 國 皇 女

卷 八 全 用 制 年 四

錢 〇 六 金 卷 各 價 定



昭和十二年六月二日 印刷  
昭和十二年六月五日 發行  
昭和十三年一月七日 訂正印刷  
昭和十三年一月十日 訂正發行

編者 山岸 徳平  
岩田 九郎

發行者 株式會社 帝國書院  
代表者 守屋紀美雄

印刷者 高橋 郁

發賣所 株式會社 帝國書院  
振替口座東京六七〇一四番

關西販賣所 三宅莊藏書店  
振替口座大阪 六九番

本館新刊

第八卷

第...號

本館新刊  
第八卷  
第...號

本館新刊  
第八卷  
第...號

本館新刊  
第八卷  
第...號

本館新刊  
第八卷  
第...號

第一卷年蘭組  
福永貞子

